幼児の教育　第118巻　第3号　令和元年7月1日発行　ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 津守 真 追悼特集 1
津守真先生から学んだこと

[実践] 保育をつなぐ
4歳児の保育の面白さ

[視点] 論考
未来の子どもたちに自然を残す

2019

夏

since 1901

第118巻　第3号
お茶の水女子大学
『幼児の教育』編集委員会

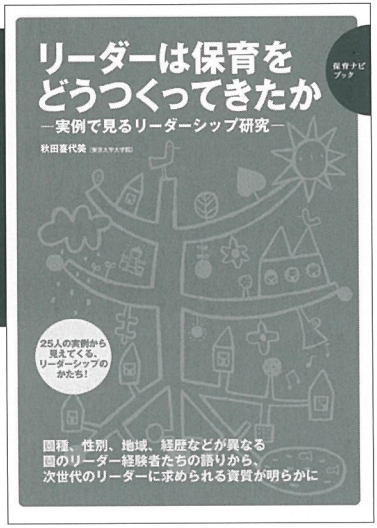
好評発売中

保育ナビブックⅩ 第10弾！

※保育ナビ（月刊保育誌）から生まれた新シリーズ。保育現場で気になるテーマをしっかり掘り下げます。

リーダーは保育をどうつくってきたか

実例で見るリーダーシップ研究



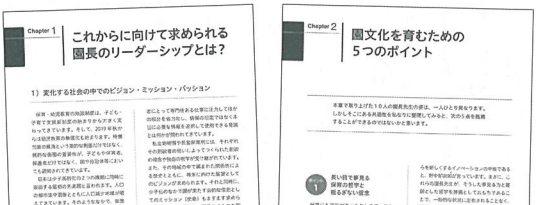
ほかでは聞けない25名のリーダーたちの本音を掲載。これまでになかった、リーダーや、リーダーを目指す方のための実践事例集です。

秋田喜代美（東京大学大学院）

全80ページ　26×18cm　定価 本体1,800円＋税

109-83 ISBN978-4-577-81452-9

本書の３つのポイント


Chapter 1 これからに向けて求められる園長のリーダーシップとは？

1）実化する社会の中でのビジョン・ミッション・パッション

Chapter 2 園文化を育むための5つのポイント

秋田先生によるくわしい分析＆解説

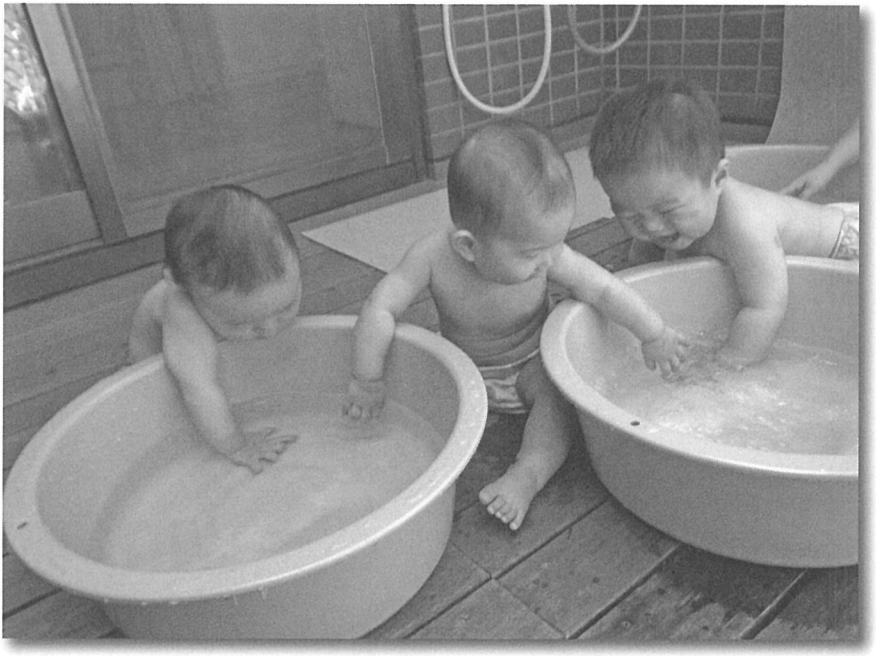
❶幼稚園、保育所、認定こども園などの園種、地域、経歴などが異なる全国25人の園のリーダー経験者たちによる語りから、次世代リーダーに求められる資質が明らかに。

❷リーダー経験者の実践事例を、**第2章：園文化を育むために、園長に求められること、第3章：人材育成の環境を整えるために、園長に求められること**の２つの視点から分類し、詳細に分析。リーダーたちの保育、園経営に対するビジョンやアクションを捉えやすくしました。

❸秋田先生が、リーダーに直接インタビューし、その「語り」をまとめているので、決断した時のリーダーならではの感情の動きなども、リアルに感じられます。

キンダーブックの フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社保育事業部（03）5395-6608にお問い合わせください。



冷たいな、水。
気持ちいいな、水。
おもしろいな、水。

子どもの情景

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育 夏2019

第118巻 第3号

写真
子どもの情景 1

目次 まど
津守真先生との再会を期して 2

特集
津守 真 追悼特集 1
津守真先生から学んだこと 4
《アーカイブズ》
「幼児の中にあって生きること」
―『幼児の教育』第69巻第7号（1970年）から― 23

実践
私の保育ノート
子どもも大人も中心に 宮武大和 26
保育をつなぐ
～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～ Vol.2
4歳児の保育の面白さ 髙橋陽子 30

連載
倉橋惣三との対話 ⑨
子どもの「夢中」をいかに見取るか 浜口順子 36

視点
未来の子どもたちに自然を残す 三宅もえ 40

ギリシャの子どもたちの日常 マリア・パパスターヴル（翻訳・構成／松田こずえ） 44

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にあるステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

文化
鎌倉おもちゃ屋物語 その2　黒須和清　49

探究
半公共的な場における子どもの外遊び環境との関わりと環境構成についての保育的研究　定行景子　61

子ども学のひろば
ナーサリーこぼれ話
イベント・メディア情報
読者投稿・編集後記　他　62

まど　津守真先生との再会を期して

昨年12月に亡くなった津守真先生の追悼特集を編集するにあたり、先生の書かれたものをいくつか読み直した。初めて読むような新鮮な印象があって、今更に津守先生にお聞きしてみたい質問がいくつも浮かんできた。ご存命中に気がつけばよかったのにと悔やむ。

喪失による出会い。親孝行したいときに親はなしともいう。生きているときはいつでも会えると思うから殊更に大事にしない、という面もあるだろうが、おそらく、本当に別れないと真の出会いはないということでもあろう。以前、「保育における別れ」という拙文を弊誌に寄稿した際、津守先生が面白いと珍しく褒めてくださった。よく覚えていないが、本当に出会うには、いったん本当に別れる時間が必要だというようなことを先生と電話で話したのだった。

倉橋惣三の「子どもが飛びついて来た時」という『育ての心』（フレーベル館）の文章を引いて、津守先生は「子どもとの出会いの核心をついています」と書いている（「若き日の志から五十年を経て」本誌第106巻第4号）。ただ傍にいることに甘えてはいけない。傍にいても別れと裏腹であること、出会いは別れの先に不意に起こる。（浜口）

特集 津守 真 追悼特集 1

2018年12月10日、津守真先生が逝去された。戦後を通して子どもに寄り添い、子ども一人ひとりの存在を受けとめ、理解し、共に生きることを保育行為として探究し続けた星が消えた。享年92歳。心理学者として、保育学者として、「障碍」のある子ども・その保護者と共に在り続けた教育実践者として、そして保育研究者・保育者の国際交流に生涯を捧げた。本誌の編集主幹も長く務められた功績に感謝を込めて、追悼の特集を組んだ。

津守真先生から学んだこと

津守真先生へ送る言葉として、氏から学んだことやエピソードなどを綴っていただきました。

●津守真先生略歴

1926年東京港区麻布に生まれる。
1945年東京帝国大学心理学科入学。
1951年～53年アメリカ・ミネソタ大学大学院に留学。帰国後、お茶の水女子大学に勤める。1983年教授職を辞して愛育養護学校校長。
お茶の水女子大学名誉教授。1991～95年OMEP世界幼児教育・保育機構日本委員会会長。2000～03年日本保育学会会長。

＊津守眞先生の論文・著書の多くは、「津守真」の表記名で出されています。本誌でも、原則的にこちらを使用させていただくこととします。

津守真先生の保育知に学び、「保育の領地」を広げよう

大戸美也子

津守真先生は、子どもの発達と発達を促す保育者の在り方を捉える視点を進化させつつ、研究を続けた方である。

1960年代の初めには、子どもたちの遊び場面とそこでの活動の切り口をあらかじめ定め、それらの活動の出現回数等をチェックして、例えば「子どもたちの砂場遊び」を客観的に捉えようとした。ところがその数年後には、一定の活動といえどもさまざまな他の活動と連携し、日々変化を続ける事実に気づき、それからは「保育の日常の全体」に目を向け、長期にわたり記録する研究法に変えた。さらに、70年代には、子どもの外部に現われる行動の裏側に「体験の世界」のあることを発見し、この発達体験の意味を捉える方法へと舵を切るのであった。そして、1983年、お茶の水女子大学教授から愛育養護学校教員・校長へ転身してからは、日々子どもたちと活動を共有しながら、「子どもたちの必要に身体で応答する保育活動を高度な精神活動」とする新・保育論を唱え、『保育者の地平』（ミネルヴァ書房　1997年）を著した。

先生が数十年かけて築いてきた保育論を一人で理解し実践に移すことは簡単なことではない。しかし、日本各地の保育現場で日々無意識のうちに子どもの必要に身体で応答している保育者の行動実態のほんの一部であっても記録し、互いに読み返す時間が与えられるなら、無意識の保育行為に内在する「保育知」を意識的に捉え、保育の質を押し上げることも可能であろう。先生が開拓した「保育の領地」を地道な努力によってさらに広げていくことこそ、先生の教えに学んだ保育者・保育研究者に残された大きな宿題ではないだろうか？

おおと みやこ（元 武蔵野大学教授）

津守先生　ありがとうございました

桝田正子

今から半世紀も前に卒論と修士論文のご指導を頂いたときから、私は津守先生にお世話になってきました。自分の不勉強ゆえに、論文提出後は研究的なご報告も出来ずじまいで心の内に忸怩（じくじ）たるものがありますが、「子どもとのかかわり・保育する者の想い」といったテーマを自分の視点としてもち続けていることを先生はわかっていてくださり、そのことが私にとっての大きな励みでした。子育ての様子を『幼児の教育』に書かせていただいたり、職場が変わったことをご報告したり、折々にお目にかかってお話しするたびに、先生も、また奥様も興味をもって聞いてくださり、先生ご自身がその時に関心をもっておられる愛育養護学校のお子さんとのかかわりのことなどを話題としながら、多くの示唆を頂きました。倉橋惣三先生のこともよく伺いました。私がお茶の水女子大学の附属幼稚園に勤務することになったときには喜んでくださって、「桝田さんが幼稚園に居たら、いつでも訪ねて行かれるから楽しみだね」とおっしゃいました。私が在職でなくても、かつて幼稚園内に研究室ももっていらした名誉教授ですから、ご自由にいらっしゃれるお立場ではあるのですが、結局お忙しい先生のことゆえ、おいでになったのは2、3回でした。

先生とご家族がキリスト教の深い信仰をもっておられたことは多くの方々がご存じのことですが、私がカトリックの洗礼を受ける準備をしていた頃（学会か何かの帰路の新幹線の中だったように思いますが）、先生が旧教と新教を対比させて話してくださったことをなぜか印象深く覚えています。ある時の保育学会の講演で、先生が聖書を引用して話された

ますだ まさこ（元 お茶の水女子大学附属幼稚園副園長。元 駒場幼稚園園長）

ことがありました。少しでも先生のお考えを理解したくて自分でもその箇所を読んでみたりもしましたが、残念ながら私の浅い信仰ではどうにもならず、いつも聖書を身近に置いておられた先生は敬服の存在でもありました。

津守先生はまた、1970（昭和45）年で廃止となったお茶大の幼稚園教員臨時養成課程や、その同窓会である美登利会のことをとても大切に考えていてくださって、数年前に美登利会の歴史を冊子として刊行した折には、大きな励ましの気持ちを寄せてくださいました。

最愛の奥様を亡くされ、国分寺に転居されてからは、国立教会の毎週の礼拝の折にお会いできることをご家族から伺っていましたので、何回か礼拝に同席させていただきました。特にお話をしなくても、人生の恩師と同じ「場」で同じ「時」を共有できる幸せは、私にとってこの上無いものでした。感謝の気持ちでいっぱいです。

自分の研究をしなさい

友定啓子

津守先生が逝去されたという知らせを、遠い現実のような思いで聞きました。

ただ幸いなことは、天国で房江先生とご一緒に和やかに過ごしておられる姿が浮かび、さほど悲しい気持ちにならないことです。

津守先生は学生時代からの恩師であり、その後もずっと私たちに語り続けてくださいました。授業でも講演でも、柔らかい声でゆっくりと子どもとの体験を語られ、そのあとの思索を話されます。私たちは子どもと心を通わせることや理解することの核心を聞いていたのでした。毎回のゼミも面白かったことを覚えています。それぞれが出会った子どもの姿を語りながら、語り手は自分の体験も重ねていて、議論が広がっていくのです。子ども

ともさだ けいこ（元 山口大学教育学部教授・同附属幼稚園園長）

の体験を深く考えることや、そこに先人の知を重ねることを学びました。直接解釈するわけではないけれど、その視点は学問と子どもの面白さにつながりました。自主ゼミで、ユングの『人間と象徴』の英語版を、悪戦苦闘しながら読みあったことを覚えています。

大学院を終えたとき、就職先はほとんどありませんでした。私は青森県出身ですが、はじめに求人の話がきた山口大学に希望を出し、先生が推薦してくださいました。そのしばらく後に東北から2件の求人があり、世間知らずの私は、先生に「同じ行くなら東北のほうが……」と迷いを口にしました。先生は「僕はこれを変える気はありません。運命だと思って諦めなさい」とおっしゃいました。着任後、上司が先生の手紙を見せてくれました。そこには「向上心のある学生」と書かれていました。40年も辞めずに続けられたのは、その言葉のおかげのような気がします。

学会では先生を慕う人々がいつも大会場を埋め尽くしていました。講演前の聴衆のわくわく感は忘れられません。一方で先生は私たちに、自分の研究をしなさいとよく言っておられました。それに応えられたかどうか、はなはだ心もとなく思えてきます。

先生のお仕事を振り返ってみると、その深さと広さは今さらながら超人的だと思えます。多くの書物も残してくださいました。文章を追っていると、声が聞こえ、献身的に動き回る姿が見えてきます。私にとってはあまりに大きな存在で、ずっと距離は残ったままです。けれど、先生のもとで学んだことで、人生が変わりました。

津守先生、たくさんの人に多くのものを残してくださってありがとうございます。でもきっと、僕はそんなつもりはないって、おっしゃるとは思いますが。

なぜ、津守真先生を追い求めてしまうのか？

江波諄子

大学の学部時代は、津守先生のご人格のあまりの高潔さに自らを恥じ、近づけない状態でいた。1968（昭和43）年の秋、先生のミネソタ大学留学時の恩師、デール・B・ハリス教授（当時はペンシルベニア州立大学）がフルブライト交換教授としてお茶の水女子大学に半年間滞在した。その折大学院生だった私は助手として教授のお世話をすることとなり、津守先生とも会話することが増えた。ハリス教授が帰国時に、日本の大学院生のペンシルベニア州立大学大学院への留学を提案した際、何人かの先輩方が諸事情で辞退されたので、なんとそのチャンスが思いがけず私に回ってきた。以来、先生との共通話題はもっぱらハリス教授とのことが多かった（先生方から学んだ人間の対等性・個別性・信愛性等のエピソードは拙著『キーウエイディン・ダイアリー―私に恩を返さなくていいんだよ！―』（文芸書房）に記した）。

津守先生は保育の世界を普遍的境地に導き、誰もが魅了された。私も例外ではなかった。それは心の奥底から無条件に感じるもので、理由を説明する必要などないと思っていた。津守先生に限り、誰もまねできないからこそ憧れた。

ある落語家によると、憧れは一種の深い愛でもあり、師弟関係は恋愛に例えられるそうだ。そして、人は無条件に自分の道を行く人に憧れる。さらに、師匠は自分が修行する。だから弟子を捨てることができるそうだ。

それぞれが自分の課題を追究することを願った津守先生の世界に、「門下」や「弟子」という表現はない。

えなみ じゅんこ（元 常磐大学教授）

では、なぜ追い求めてしまうのか？

目下のところ以下のごとく考えている。

私たちは誰も、現実の世界に清濁、利害、成否、欲得等の本音の世界があるのを知っている。腑に落ちないまま、何とか折り合いをつけて生きていかなければならない。だが、知識＝アートを学ぶ私たちは、今見えている世界の不可解さの奥に潜む何かを探したい。明らかにしたい。信じたい。救われたい。希望をもちたい。穏やかでありたい。愛に包まれたい。

その方向を探し求めていくと、そこに津守先生が揺るぎなく佇んでいらしたのだ。そう、先生は傷つき、懊悩し、絶望しながら生きる私たちをその存在で救ってくださっている。もしかしたら、津守先生のようになりたいというより、自分自身が先生のまなざしの中の子どもになりたいのかもしれない。時代に合う子どもを育てることは大切だが、政治や思想が偏狭したとき、人は視座を見失うことがある。やはり津守先生はポラリスなのだ。

最後に晩年、先輩の高橋洋代さんらと共に白金のお宅で、お互いに手作り料理を持ちあいご夫妻と過ごす、豊かなひとときの仲間に入れていただけたのは幸運極まりない経験だった。

津守真先生から学んだこと

関口はつ江

私が今日まで保育にかかわる仕事を続けることができますのは、津守先生からのお教えによると言っても過言ではありません。自分の人生の曲がり角に来たときにかけていただいた一言は、「元気なら、それでいいのです」。「自分としての在り様」の大切さを示唆していただき、曲がり切って先に進んでよいのだ

せきぐち はつえ（東京福祉大学教授）

と、後押しをしていただいた経験があります。キーワードとしての「希望」と「意味」を今も大切にしています。

右も左もわからない大学の学部時代、幼児教育に関する津守先生の講義は、学生としてインパクトの強いものではなかったようでよく覚えていません。しかし、講義内容はいつの間にか人間観、発達観、教育観の母胎となって内側に根付いていたのだと思います。学生生活の後、半世紀以上も保育者養成に携ってきましたが、常に立ち戻るのは津守先生のご著書でした。保育の実践研究の在り方、学生指導の方向は津守先生ご自身の実践と解釈から指針を得て多くの保育者を育てることができました。子どもも大人も、どのような状況にあっても「前向きに生きようとする精神の力」があることを信じることを教えていただき、それを伝えてきたと思います。社会や学問上の変遷があっても、津守先生の教育哲学は、人がその人として生きようとする力を支える力をもっていると思います。

また、先生は言行一致ということを、しっかりと見せてくださいました。ご多忙な中、保育者の研修会などにもよく足を運ばれ、保育者の発言に耳を傾けながら感心されるお姿から、学問（研究）と実践（現場）は異なる世界であり、それぞれを互いに尊重すべきことを示しておられました。お茶の水女子大学教授から愛育養護学校校長へ転身されたとき、「お茶大の教授は他の人でもできますが、養護学校校長は私がやらなければならないから」というようなことをおっしゃっていたように、津守先生が私人（個人）として、実践者として、研究者として一貫した行動を貫いておられる姿から、人は信頼に足るものだという信念をもたせていただくこともできました。困難を伴う自分の課題、学生や同僚と向きあうとき、心を決めて正面から向きあうと、そこに

新しい道を探し出すことができるはず、という希望を失わずに頑張ろうしている昨今です。

津守先生、ありがとうございました

高橋洋代

クリスマスカラーに彩られた国立教会の祭壇で、白いおひげを蓄えられた先生は少し横を向かれて穏やかにほほ笑んでいらっしゃいました。そのまなざしは子どもたちに注がれているように思えました。先生のご生涯を象徴しているようなご遺影でした。

半世紀以上も前のことになるのですが、私は津守先生に大学の卒論のご指導を受けました。「保育者のパーソナリティに関する研究」などという大それたテーマを掲げた向こう見ずな学生を、先生は忍耐強くご指導くださいました。それにもかかわらず、私は先生に何のご相談もせずに、大学院では田口恒夫先生の研究室に移ってしまいました。先生はそんな不義理な学生に対しても、以前とまったく変わらず優しく接してくださいました。このことは津守先生のご人格の高潔さと共に、自分の愚かさ、申し訳なさ、として忘れることができずにおりました。

先生が脳梗塞で倒れられたということを耳にしたとき、罪滅ぼしに何かのお手伝いができればと思い、お手紙を差し上げたのです。すぐにお電話があり、先生の新しいご本に入れる予定の手書きの文章をパソコンで入力するお手伝いをすることになりました。それは、若き日の先生が留学先のアメリカから毎日、房江先生に送られたお手紙で、小さなトランクからあふれ出ていました。「パンドラの箱を開けてしまったの」と房江先生がいたずらっぽくおっしゃいました。その後、２００８年

たかはし ひろよ（元 立教女学院短期大学教授）

から2011年まで、入力原稿をお届けするために、1か月か2か月に一度のペースでお宅に伺った際には、いろいろなお話を拝聴する機会を頂きました。ご研究の転換点のお話、保育とは、お孫さんや愛育の子どもたちのこと、キリスト教のことなどお話は多岐にわたり、私にとって、とても幸せな宝物の時間となりました。でも、その間には、ご夫妻にとって耐えがたくお辛い出来事もありました。ちょうど私がお訪ねする前日にご長男が亡くなられ、房江先生からのお電話に、お二人の深いお悲しみとお苦しみを思うと、お慰めする言葉がありませんでした。すっかり憔悴されたお姿に、ご本の出版もご無理かと思われましたが、お二人は、お引き受けになられていたご講演も、お辛かったその夏にお約束通りになさり、徐々にご本の出版の作業も再開されました。そのご本、『私が保育学を志した頃』（ななみ書房　2012年）が完成したときの、ほっとされたような、うれしそうなお顔は忘れることができません。

いつか「津守先生がご自分の信念のままに生きることがお出来になったのは、房江先生のお支えがあったからこそ」などと生意気な口をきいた私に、先生は素直に「本当にその通りです」とおっしゃいました。お二人はお互いを尊敬し、大切にされて、まるで一つの人格のように思えるほどでした。ある時、先生が「人生の最晩年を生きるのは大変ですよ」とおっしゃったのですが、その時は房江先生はまだお元気で、先生おひとりで過ごされることになるとは思ってもいらっしゃらなかったことでしょう。また、幼い頃から過ごされ、すべての思い出の詰まった白金のお家を後にするのもどんなにお辛かったことでしょう。

でも先生は敬虔なクリスチャンとして、揺るぎない信仰を貫かれて、生き抜かれました。本当にお見事なご生涯であったと思います。

津守先生、数え切れないほど多くのことを教えていただき、本当にありがとうございました。

津守先生から学んだ人に対する敬意の念

榎沢良彦

私を幼児教育（保育）の世界に導いてくれたのは、津守先生です。大学4年時に、幼児教育をテーマに卒業論文を書きたいと、お茶の水女子大学で教鞭を執られていた津守先生に相談したことがきっかけで、私は15年間愛育養護学校で障がい児保育に携わることになりました。津守先生は愛育養護学校に深くかかわっており、自ら障がい児保育を実践されていました。私は、そのお姿を身近に見ながら、15年間を過ごしました。それは大変幸運なことだったと思います。

津守先生は、いつも子ども一人ひとりに寄り添い、子どもと共に生きようとしていました。その営みの根底には、「子どもへの敬意の念」がありました。それは、理念として津守先生が意識し、実行しているものではなく、先生の身体に染みついたものであったと思います。津守先生は子どもの前にあるとき、敬意の念からおのずと子どもに寄り添っていたのだと思います。つまり、子どもへの敬意の念は津守先生の本質なのです。それ故、私には津守先生の存在そのものが温かさを醸し出しているように感じられました。

津守先生の「人に対する敬意の念」は、子どもに対してだけではありませんでした。愛育養護学校の職員、ボランティア、実習生、保護者、そして大学の学生など、あらゆる人に対して敬意の念を抱き、共に生きようとし

えのさわ よしひこ（東京家政大学教授）

ていました。

私は大学院での先生のゼミに参加させてもらったことがあるのですが、先生の研究室の雰囲気は私が在籍していた大学の研究室の雰囲気とはかなり異なっていました。学生たちが集い、お茶を頂きながら先生と語らうというように、アットホームで受容的な雰囲気でした。それ故、ゼミだからといっていたずらに緊張することもなく、参加者はのびのびと発言していました。そして、津守先生は、学生の考えを大事にし、まさに学生から学ぼうとしていました。このような受容的な雰囲気は、津守先生が学生に対して敬意の念を抱いているからこそ生まれるのだと思います。

愛育養護学校で毎日行われる保育後のミーティングでも、アットホームで受容的な雰囲気がありました。参加者は思い思いに自由に発言し、先生はそれを楽しそうに聞いていました。先生のそのような在り方がさらに私たちを自由にしてくれました。それ故、私たちは時間のたつのも忘れるほどでした。津守先生には、人を自由に話したくさせる雰囲気があったのです。

このように、私は津守先生の存在に温かさと受容的な雰囲気を感じてきました。その根底にあったのは「人に対する敬意の念」だと思います。それは私が津守先生から学んだ最も大事なことです。この念が私の身体に染みつくまでには至らないでしょうが、研究者として保育の実践者として、さらには人として、私は「人に対する敬意の念」を忘れないようにしようと思います。

お茶の水女子大学附属幼稚園で

幼児の素直さ、青年の直観力、大人の成熟した知恵。それを社会的に実行する大人の知恵
～津守真先生を偲んで～

上垣内伸子

In December 2018 we have lost our long time OMEP friend, Professor Dr. Makoto Tsumori, an Honorary member of OMEP. OMEP Asia Pacific Region had sent our heart-felt condolence and sympathy with love and friendship to the Japanese National Committee of OMEP.
Udomluck Kulapichitr,
Vice President of OMEP Asia Pacific Region

ＯＭＥＰアジア太平洋地域副総裁のタイのウドムラックさんから、アジア太平洋地域各国のＯＭＥＰ会員に向けて、津守先生のご逝去を悼む言葉が送られました。ＯＭＥＰ日本委員会の元会長であり、世界ＯＭＥＰ名誉会員であった津守先生を惜しむ声が、各国から届けられています。平和な世界は子どもの心に平和の種を蒔くところからと設立されたＯＭＥＰ（世界幼児教育・保育機構）に日本が加盟して50年になりますが、その発展に力を尽くされた津守先生は、いつも国境を越えて、世界の保育の仲間とのつながりの中で、子どものこと、子どもと共につくる未来のことを考えていらっしゃったように思います。

10年前のこと、津守先生から、子どもの平和を願い、日々、子どもや子どもを取り巻く人々とかかわっている私たちの思いを世界に伝えるために、日本委員会の会員の一人ひとりが、絵や言葉（日本語、英語、フランス語、スペイン語）で自分のページを作り、それを束ねて冊子にしようという提案が出され、日本委員会40周年記念事業として『希望の花束』

かみがいち のぶこ（十文字学園女子大学教授。ＯＭＥＰ日本委員会）

と名づけたメッセージの募集を始めました。まもなく東日本大震災が発生し、東京で開催予定のアジア太平洋地域会議も直前になって中止せざるを得ない状況となりました。その時、津守先生から『希望の花束』のメッセージが届きました。２０１１年のことです。

このメッセージのもつ真実味は今もなお失われることなく、一層重要味を増しているのではないか、そう感じて、再び津守先生のこのメッセージを発信したいと用意していたところのご逝去でした。

津守先生、これからも保育学徒の私たちをお導きくださることを願っています。

OMEPの今年の夏に開催予定のアジアの会合がいったん中止になったのは、残念でしたが、いまの日本の状況を考え、世界の人たちが集まれるかと考えると、中止になってよかったと思いました。1995年８月の世界大会の時は、関西の大地震のときでした。今回は東日本大震災です。あのときは東京に住む者にとっては遠くのことと感じていましたが、今回はもっと近くの出来ごとでした。原子力のことは海や大地の汚染が加わって、世界規模のこととなりました。世界の方々が日本に旅行するのを恐れるのも当然でしょう。私共はこのことを深く心に留めてこれからの個人の生き方と、国の進み方を、これまでよりもっと大きな目で見ることを求められる世界になるのでしょう。

OMEPは第二次世界大戦の時代に、戦争とは逆の方向に、荒々しくなるのではなく、高尚な精神を保つことに力を注いで、世界と連帯してきました。OMEPを創設しこれを存続させてきた先輩たちのお陰です。

今回は、その時代の続編です。私共の世界がもっと根本的に、本来の人間の姿に立ち戻り、子どもが心で語ろうとしていることに注意深く耳を傾けようではありませんか。

幼児の素直さ、青年の直観力、大人の成熟した知恵。それを社会的に実行する大人の知恵。

津守真先生からの宿題

向山陽子

「眞先生……宿題をまだ提出していません」。訃報が届いたとき、天を仰ぎつぶやきました。

１９７０年頃、学生の私には、眞先生は、迷いと深い思索の中にいらっしゃるようにお見受けしました。学生運動の空気が残る中、絞り出すような言葉から、モーリス・メルロー＝ポンティらの名と、現象学の存在を教わりました。また、子どもを観察するとは、客観と主観とは、直感とは、保育の科学的研究とは、と、保育学の真髄を50年前に私ども学生に提示されました。

35年前、子育てとの両立が果たせず、大好きな職場と幼稚園教諭の仕事を離れると報告に伺ったとき、目を閉じて「なんだ……、少しわかってくると辞めちゃうんだから」、そして、ほほ笑んで「仕事してると、わが子の始めの一歩が見られないけどね」と。「津守学」が、ほとばしり出始めた頃でした。眞先生の思いやりを感じ、子育てと伴走する保育の道を歩みたいと、心に刻みました。

幼いわが子を連れて、〝はるにれの会〟で眞先生を囲んだとき、電話に中座されました。戻られた眞先生は満面の笑みで「文部省からこんな話が来るとは、こんな時代が来るとは……」とおっしゃったのです。後日、故高杉自子先生にこの話をしたら「それ、私よ、あの電話から始まったのよ」と、やはり満面の笑みの返答がありました。私たちは、子ども主体が打ち出された平成元年幼稚園教育要領改訂への始めの一歩の瞬間に居合わせたのかもしれません。

30年ほど前、渡蘭前のわずか1年間ではありましたが、『幼児の教育』の編集に携わった

むかいやま ようこ（大学他講師。大学院生）

とき、眞先生の自筆原稿に触れる作業が、至福の時間でした。私は、眞先生の字が大好きです。編集会議に提案し、扉の文字を書いていただきたいとお願いすると、「私の字は恥ずかしい、堀合先生がよいでしょう」と、辞退されました。残念でしたが、〝至福の時間〟をより大切にした頃が思い出されます。

24年前、K幼稚園園長として、子どもたちとの日々が始まりました。眞先生の著書、とりわけ『保育の体験と思索』（大日本図書 1980年）、『子どもの世界をどうみるか 行為とその意味』（NHKブックス 1987年）は、お守りでした。園便りに引用したり、『幼児の教育』を保育者、親御さんたちと購読して、子どもが表現する世界について、保育について話しあったものでした。幼稚園にお迎えしたとき、「この調子で〝幼稚園〟の枠をはみ出ちゃいなさい」と。

10年ほど前、園長職2園目のY幼稚園に、眞先生と房江先生のお二人に講演をお願いしたとき、園内をご覧になって「ワイルドでよろしい」と。そして「向山さんは、どうしてこういう保育をするようになったの？」と、問われたのです。眞先生と、房江先生、児童学科の先生方に育てていただいたから……と出かかった言葉を飲み込み、問いの意味を探る自分がいました。

一人の三歳児男児とあぐら座りの眞先生が醸し出す空気感に誘われ、寄っていく子どもたち……。あの日の光景を胸に、この数年、眞先生からの宿題に取り組むべく、私の保育のルーツを歴史の中にたどっています。

倉橋惣三から津守真への道筋、津守真が拓いた道がおぼろに見えてきました。

あらためて、津守ご夫妻のように、闘う人、子どもにとってうれしい人、子どもと育てるものの傍らに居続けて、共にその時を深める人でありたい、と思うのです。

どこまでも届く言葉
――津守真先生のこと

西 隆太朗

保育について考えるとき、いつでもたどり着くのが津守先生の言葉である。子どもの訴えに耳を傾けるとき、その子のためにどうすればよかったか振り返るとき、津守先生の言葉が思い浮かぶ。保育の技術や「正解」が、そこに記されているわけではない。そうではなくて、ただ保育の根本に立ち返って考える姿勢に触れて、私自身、新たに考えさせられている。私にとって津守先生の著作は、私自身が子どもと出会い、考え、私なりに歩んでいく上での、対話の相手である。津守先生の著作を読むとき、先生の真摯な探究の過程から多くのことを教えられているが、それだけでなく、私自身の問いが真に受けとめられている――そんな思いがする。そのことは、いつまでも変わらないだろう。

津守先生は生涯をかけて、保育の根本を、そして人間の原点としての子どもの世界を探究してこられた。他の誰かがどう言うか、どう評価されるかなどといった些事にはまったく流されることなく、目の前の子どもという何よりも大きな存在に一心に向きあってきた。保育研究者としての「転回」以後、津守先生は客観主義を超えて自ら子どもと出会う保育研究を切り拓かれたが、その核心には、人と人として、対等な重みをもった存在として、子どもと出会う体験があった。そうした体験から生み出された言葉はかえって、その時々の世間の動向に縛られることなく、時代を超えてどこまでも届く普遍性をもつこととなった。

「理解するとは、知識の網の目に位置付けることではなくて、自分が変化することである。子どもと交わることは、保育者自身が日々変

にし りゅうたろう（ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科准教授）

化し、成長することにほかならない」（「保育の知を求めて」『教育学研究』第69巻第3号2002年）。保育者が自分を中心に置いて、あれこれと知識や技術を適用するのとは違っている。そうではなくて、自ら混沌の中に身を置き、子どもに心を開いて共に新たな答えを探していくことが出発点であり、その過程では自分自身の在り方そのものが問われることになる。子どもとの出会いについて、こうした次元で語ってこられたのは、誰よりも津守先生だった。

私は津守先生から直接教えを受けたわけではないが、先生の言葉にずっと支えられてきた。この数年間にお会いする機会に恵まれたが、その最後となった日の別れ際、「子どもたちのために、お互いに頑張りましょう」と励ましてくださったことは、今も心に残っている。先生は、いつでも物事の根本を見つめながら、時を見誤ることなく、目の前の相手にとって必要な言葉をかけてくださる方だと思う。背中を押してくださった明るい笑顔を、思い返している。

津守先生のお姿からは、まっすぐに真実だけを追究する峻厳さの一方で、温かな満面の笑顔が思い浮かぶ人も多いだろう。子どもと同じように優しく無邪気で、周りの人々を包み込む笑顔である。子どもは目の前の相手に、そしてどんな物事にも真剣に出会い、かかわっている。自分が支えられる以上に、周りの人々を大きな力で支えている。子どもたちを守ることは保育学の使命の一つだが、それだけでなく、人間の中にある子どもらしさ、保育学の中に生きる子どもの世界を守り抜くこともまた、津守先生が身をもって教えられたことの一つだと思う。

「同僚」であった津守真

西原彰宏

津守先生は優しいだけでなく、自分と自分が作ろうとする学校について厳しい考え方をもっていた。それがあったから、優しさが人を奮い立たせる力をもっていた。

若い頃、「津守式発達診断法」と私が口走ったとき、先生は即座に「乳幼児精神発達診断法です」と正した。自分が作ろうとしたのは、「津守式」などではない。普遍的に通用するものを作ろうとしたのだ、と言いたいのだと思った。保育の中で起きる1回ごとに異なる独自な現実を重視しなくてはならないが、同時にその現実の中に普遍的なものを見いださねば、「現実」は当事者にしか意味のないものになる。現実を、目に見える事実だけでなく、さまざまな層で見て書こうとすることは、普遍的なものを見いだそうとする努力と一体だった。

同じように、「学校を宗教の学校にしないこと」、「党派を作って主張しないこと」—研究の上でも教育の在り方の上でも—この二つの戒めは別々の機会に聞いたが、普遍的なものを作らなければ、広い世界との対話を失うという点で共通している。加えて、党派は学問の世界では精神の独立と自由を失わせると考えていたと思う。「私には弟子はおりません。職員は同僚です」と言うのを職員は皆、幾度も聞いた。静かな言い方だが、私には、「同僚」という言葉が、津守先生の単なる優しさとは聞こえず、自分に寄り掛かることを拒否し、発奮せよ、自分の足で立つようにと促す言葉に聞こえた。そういう先生を、この頃しきりと思い出す。

にしはら あきひろ（前 愛育養護学校校長）

幼児の中にあって生きること

津守 真

―『幼児の教育』第69巻第7号（1970年）から―

最近、私は一連の幼児の絵をみていて気がついたことがある。その子どもは、五歳の後半になったころから、家の絵をよく描き、その家にはドアが描かれている。そしてそのそばに女の子が描かれる。このような絵が半年くらいの間に数多くかかれているのである。

はじめのうちは、一枚の画面の上の家と女の子は相互に関連のない絵かと思っていたが、子どもと会話をかわしたり、その子の絵を何枚も見ているうちに気がついたことは、それは女の子が家から外に出かけていくことを描いているということである。家といっしょにかならず描かれるドアは、それを開いて外に出ていくという行為を示すものである。そして女の子は自分自身と考えてまず間違いがなさそうである。

この子どもは五歳になってから急に活発になり、友だちともよく遊ぶようになり、絵にあらわれているように外の世界に興味を示している。そして、生活のいろいろの面で外向きの姿勢がみられるようになっている。

私はこの一連の絵をみていて、絵に子どもの生活や態度があらわれるという意味でおもしろいというのみでなく、子どもは絵をかくときにまで、自分が生きていく生き方に関心を示し、そのことに打ちこんでいるのを知って心打たれた。

幼稚園は子どもの教育の場であるというが、いったい教育の場というのはどういうことであろうか。おとなが子どもをいずれかの方向

にひっぱっていこうと努力する場と考えてよいであろうか。そのような面はある。先生はそのクラスの子どもたちのことにいっしょうけんめいになるし、先生自身は理想や目標を高く掲げていることはたいせつなことである。しかし、それより以前に、子ども自身、生きることを求めている。幼稚園は、子ども自身が自らの生き方を求めて努力している場である。その努力というのはおとなのように局限された意味ではないし、その求め方はことばや文字や観念的な思想によるものではない。もっと体ごとのことである。そのような子ども自身の努力を前提としてはじめて教育の場は成り立つのである。

幼稚園で子どもが口をきかなかったり、乱暴をしたり、いうことをきかなかったり、けんかをしたり、その他おとなにとって不可解とみえる行動をするのは、子どもが自らの生き方を求めているからともいえる。子どもは、自分がどうしたらよいのかを、子どもなりにさがし求めている。自分自身の生き方を求めているということにおいて、幼児も教師も共通である。

幼稚園の教師が子どもの中ではたらくということは、自分自身、人間としての生き方やあり方を求めていることが前提となっている。おとなとしての教師は自分の頭の中でからまわりすることが多い。しかし教師として子どもの中にあるときには、子どもという対象があり、相手があるから、自分のあり方をきめるのはより容易である。相手である子どもによりよく振舞うことができるようにということが明瞭な課題になるからである。

教師ということばは、児童や生徒に対する公的な役割を示す語である。一体、幼稚園の先生が、幼児の中における自分自身のことを意識するときに、教師ということばで意識す

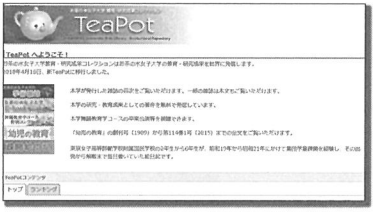
るとしたら、何かたいせつなものが落ちてしまうのではないだろうか。「せんせい」は、子どもと社会的な身分の違いを前提として振舞うのではなく、人間として共通な部分によって相互に理解しあうのである。幼児と教師は、それぞれ、人間として生き方を求めている人間と人間である。そこで教師は、相手の人間がよりよく生きることができるようにということを、自分自身の課題として真剣にとりくむ人間でなければならない。

幼稚園の中には、根本から問題を問い直して考えていかねばならぬ問題がたくさんある。子どもがそんなに真剣にはじめての新しい人生を進もうとしているときに、おとなもまた真剣に、そこで問われている課題にとりくまねばならないと思う。幼児の生活環境のこと、教育の内容のことなどもある。音楽のように、教育の内容であるとともに養成機関の大きな問題であるものもある。職員間の人間関係や組織のように、目にみえないが重大な力をもつ問題もある。教育という語がよいのか、保育という語がよいのか、ほとんど同じものを指しながら、都合によっていろいろに使われることばの問題もある。またその中にあって、幼児に関する学問はどのようであったらよいのか、私自身、最も関心のある課題である。

幼児の教育 バックナンバーを WEBページで公開中

「幼児の教育　TeaPot」で

検索



お茶の水女子大学 教育・研究成果コレクションTeaPot
https://teapot.lib.ocha.ac.jp/　の中にあります。

明治34年発行の創刊号から、現在、平成29年発行の第116巻第1号までご覧になれます。

子どもも大人も中心に

宮武大和
（幼稚園教諭）

青空が広がり、セミの鳴き声が響く夏の森に、今年も「流しそうめん」の日がやって来ました。流しそうめんといえば、竹を割ったものに水を流して……というのが一般的ですが、札幌トモエ幼稚園の流しそうめんはちょっと様子が違います。板を組み合わせて作った幅45センチ、長さ20メートルの滑り台状のものにビニールをかぶせて緩やかな斜面に設置し、そうめんを流します。

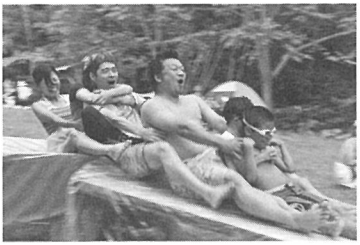
幅が広いのは、そうめんを食べ終わった後のお楽しみ、そうめんの代わりに人間が流れるためです。人が流れるときにはさらに斜面の下までビニールを延長し、ゴール地点には組み立て式のプールを置き、スタートからの全長は40メートルのウォータースライダーとなるのです。

背中を押してもらってスタートすると、徐々に加速し、最後は勢いよくプールにドボン！　大きな水しぶきと歓声が上がります。子どもたちはもちろん、大人も滑ります。ひとりで滑るだけでなく、親子や夫婦一緒だったり、5～6人で連なって滑ったり、子どもたち以上にはしゃぐ大人の姿が見られ、滑っている人、見ている人、背中を押す人、みん

宮武大和（みやたけ やまと）
札幌トモエ幼稚園主任教諭。公益社団法人こども環境学会評議員。NPO法人園庭・園外で野育を推進する会 理事。

なに笑顔が広がります。

子どもも大人も、やりたいと思ったときに自分で一歩を踏み出すことが大切との考えから、滑るのを誘いますが強制はしません。はじめは見ているだけだったり、滑るのを躊躇したりしていた保護者も、滑っている人の楽しげな様子に触発され、「ぬれるのはハードルが高いと思っていたけれど、思い切って滑ってみたら、気持ちよくて何度も滑った」とか、「子どもに戻ったような気持ちになれる」という声が聞かれます。



札幌トモエ幼稚園ではこのような、流しそうめんイベントをはじめ、日常的に保護者への園開放を行いながら、園庭での親子キャンプや、大人向けのゲームが半分を占めるレクリエーション大会など、園の生活の中に保護者が主役となり楽しむ要素や、保護者が子どもを理解する機会となる活動を取り入れています。

子ども時代に遊びの体験から学んで育ってきたという実感が薄い保護者は、子どもが遊びの中で学んで育っていくことを理解するのに時間がかかることが多いように思います。例えば最近は、子どものけんかをすぐに止めたり、けがへの過剰な心配や汚れることへの嫌悪、過干渉等、子どものやってみたいという気持ちを抑制するかかわりが多く見られるようになってきました。また、子どもとの愛着関係をうまく結べないことに悩み、自分自身を肯定できずにいる保護者も増えています。

そうした状況の保護者に、子どもと同じように遊びを経験することで、心が解放されることや、子どもが成長する過程に欠かせない経験があること、わが子と体験を共有することで信頼関係が深まることなどを感じてもらうために、保護者も主役となる活動を積極的に取り入れているのです。

自身に経験が無いことを言葉だけで理解することはそう簡単ではありませんが、子どもと同じように、そうめんになって水の中にドボン！　と滑るという「子ども体験」の取り戻しによって、子どもがワクワクしている気持ちや、子どもが遊びの中で学んでいることなどへの理解が深まっていきます。そうすると、子どもの興味や、楽しんでいる気持ちに共感できる保護者へと変化し、子どもの言動に対して否定や禁止が減り、子どもがより素直な表現をして生活できるようになっていきます。

園という場でそのような機会を積極的に提供していくことは、子どもに共感的な保護者へと成長を促し、その結果、家庭での親子の良好な関係が持続していくことで、生涯にわたって子どもの健やかな成長を支えることにつながります。

保育を語るときに、「子ども中心に」という言葉が盛んに使われていますが、「子ども中心」であるためには、大人が子どもをどれだけ受容できるかが問われます。大人にも心の余裕が無ければ、子どもを受容したり、成長を待つことが難しくなります。近年、切れ間なく伝えられる子ども虐待のニュースや児童相談所が扱う虐待相談対応件数の急増は、大人に余裕がなくなっている証左だと思います。

どんなに園での生活が充実したものだったとしても、家庭の環境や保護者との関係性が子どもにとって心穏やかに過ごせるものでな

ければ、子どもが健やかに成長することは望めません。

禁止や否定の言葉を多く受けて育った子とそうでない子との間には発達に大きな差が見られるといわれます。子どもには自ら考える力、自ら育っていく力があり、それを信じて見守ることができる大人の存在が必要です。そういった観点から考えると、子どもと大人は車の両輪で、「子どもも大人も中心に」考えることが重要だと思います。「子ども中心」を謳うだけでは、子どもの権利を守りきれなくなっているのではないでしょうか。園が保護者と積極的に連携し、具体的に体験を提供したり対話の場をもったりすることが必要な時代だと感じています。

２０１８（平成30）年の総人口に占める子ども（15歳未満）の割合は12・３％となり、１９８２（昭和57）年から37年連続で減少しています。子どもが減り続けていくことで、さらに大人の都合が優先される社会になっていくのではないかと危惧しています。大人の管理下で生活することが多い現代社会の子どもにとって、最も影響の大きい環境は「大人」です。子どもは自分で環境を選ぶことができません。大人に対して意見することもできません。子ども中心を実現するために、いかに大人に向けて子どもの世界を発信し働きかけていくかを、より真剣に考えなければならない時代が来ているのではないでしょうか。

幼児期は長い人生の土台となり、後から取り戻すことが簡単ではない重要な時期です。子どもの権利を代弁しながら、大人のドキドキ（心配）と子どものワクワク（挑戦）の橋渡しをして、子どもと大人どちらも支える、私はそんな保育者でありたいと思っています。

保育をつなぐ

～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～

Vol.2

4歳児の保育の面白さ

髙橋陽子

シリーズ「保育をつなぐ ～お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信～」では、子ども・保育者・保護者がつながり、共に生き、共に創り、共に育つことを目指し、本園をめぐる多様なつながりを視点に発信する中で、保育を見つめ直していきます。

シリーズ第2回は、本園に長く勤務する4歳児学級担任が、遊びの中でのモノ・ヒト・コトとのつながりを丁寧にひもとき、子どもを理解すること、遊びの充実を支える保育者のかかわりについて省察します。

保育者として子どもとかかわる時間を重ねるほど、保育の中の小さなコトが、とても大切であり、保育者自身も自分だけで子どもと向きあうだけでなく、ヒトとつながることが大切だとあらためて気づかされます。

＊

「先生、お山に来て」と、担任している年中女児に声をかけられ出向いてみると、「よく

髙橋陽子（たかはし ようこ）
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

いらっしゃいました。家をご案内いたします」と急に丁寧な口調になり、「こちらにどうぞ」とお山のあちこちに連れていってくれました。時々男児、女児が「にゃーにゃー」と甘えてくると、「あっちに行ってなさい」「お姉ちゃん、遊んでやって」と手で追い払うようにもします。私もかしこまって「猫を飼っているのですか?」と問うと、「そうなんです。1匹はいいんですが、もう1匹が言うこと聞かなくて」と言って、「気にしないでください。次は……」と案内に戻ります。「お山」と本園で呼んでいる場所は、築山、イチョウやケヤキの大木、丸太の遊具等があり、あとは程よい広さの雑草園です。それでも彼女の目や頭には、このお山に、玄関、遊び場、お風呂などが見えていたのでしょう。

なりきって遊んでいても、時々、本人に戻ります。お山に隣接するいずみナーサリー(お茶の水女子大学にある学内者向け託児施設。お山は、幼稚園と共有の場)に入る10段ほどの階段に積もった落ち葉を集めたいと、みんなでミニ熊手を取りに行きました。猫もお母さんもお姉さんも一緒に葉を集め、今度は雪合戦ならぬ「落ち葉合戦」になっていきました。何でもすぐに遊びにしてしまう子どもたちの面白さを感じました。

このように年中組では、役になりきる中で、時に「自分に戻ることもある」ような緩やかなごっこ遊びが繰り広げられています。そして、友達の状況を感じ、環境を遊びに取り込みながら遊びを共有している姿を見ると、子どもの遊びの世界に教師はどうかかわるのか、子どもに任せておいたほうがいいのではないか、と感じることがあります。

3学期に入り、投げコマをしている年長児を見て、「先生、コマ、やりたい」と言ってきたことをきっかけに、準備しておいた糸引き

コマを出しました。興味をもってもすぐには回せるようにならないのが、コマの醍醐味、と私は思っているのですが、あまりにできないと「やーめた」と引き出しにしまわれ、なかなか再挑戦しないこともあります。しかし、今年の年中組の子どもたちはいつもとは違っていました。何度も挑戦し続け、回せる子どもたちがじわじわと増えていきました。1か月以上もの間、登園するとコマ好きの仲間が集まり、コマを回す場を作り出し、対戦したり、その場がごっこ遊びにつながったりしていました。

コマは、色を塗り重ねたり、装飾を付けたりしながら、常に変化していきます。回すと色が変わることに始まり、油性ペン、水性ペン等、ペンの種類によって同じ色でも回すと違う風合いになることや、金・銀の紙を貼ると、色が浮かび上がることなどに子どもたちは次々気づきました。その都度「先生、見に来て」と声をかけられ、一緒に感動しています。装飾を付けると回しにくくなると感じれば、糸が引っ掛かるから、重くなったから、と原因を考えます。いろいろな過程を体験して、コマとのかかわりが進化していくのだと、感心することもたくさんあります。私は、一緒に色を塗ったり対戦相手になったりしながら、「すごいね」「きれいだね」と言うだけになっていると感じることがあります。

2月になって、「先生、色水できた。入れ物ちょうだい」と、園庭につながる保育室の扉から声をかけられました。園庭では、暑い夏でも寒い冬でも、色水作りを楽しむ姿が見られます。いつでも興味をもったときに手に取れるようにと、保育室から園庭に出た三和土（たたき）の一角にボウル、ざる、透明カップ、漏斗（ろうと）等を置いています。子どもの遊びの様子を見ながら、泡立て器、すり鉢、すりこ木等もタ

イミングを計って出してきます。

まだ暑かった夏の日、手洗い用のせっけんを持ち出し、大きなたらいの周りを囲み、洗濯して泡を立てることを楽しみました。子どもたちは泡をカップに移しました。お玉があるとよいかも、と新たに道具を出してきます。「ソーダです」と子どもが言うと、いろいろな味になるように、食紅を出してみたりもしました。ある時は、チョークをすり鉢に入れ、水を注ぎ、底にこすって色を出していました。そのうち、砂場のふるいを使って細かい粉を作り出し、それを混ぜたり量を加減したりしながら水に溶いて色水を作り始めることもありました。砂場のふるいを使うアイデアは、その少し前に、湿った木片を削り、かつお節を作っていたことがきっかけだったように思います。

チョーク以外に何か他の物はないかと思っていたときに、ある研究会に出席した隣の担任が、クレープ紙もきれいに色が出るという情報を得てきました。そこで、子どもたちに「これでやってみない？」と投げかけてみました。クレープ紙を数センチ四方に切り、水を張ったボウルに入れると、鮮やかな色があっという間に出てきました。園にあった6色で作ってみると、そのうち3色のみ色が出る、他のはすりこ木でこすると紙がちぎれて色が出る、そういったことに気づいていきました。2日ほどクレープ紙の色水作りが見られましたが、その後は「やりたい」という子どもはいませんでした。その代わり、葉っぱをちぎってきては、すり鉢ですっている子どもたちがいました。さっと色が出てくる色水遊びにも、鮮やかに色が出てくる驚きや、出来上がりの色の違いを楽しむ要素は含まれていると思いますが、力の入れ具合や、水や葉っぱの量を加減することから生まれる、少しずつの色の変化、葉っぱの変化を見ることが、子ど

もの心を動かしているのだろうと考えました。

遊びの中で出会い、手にする物や道具によって、子どもの体験は違ってきます。子どもが「こうしてみたい」「ああしてみたい」と思ったときに使える物や道具を準備しておいたり、場所や時間を保障したいと願いながら、子どもたちとかかわっています。

2月の別の日、「先生、マグネットボード出して」と子どもが言ってきました。このマグネットボードは、四角や丸、三角、半円形など、色も大きさもさまざまなマグネット付きの木製のパーツを大きなボードに張り付け、模様や絵を描いて遊ぶことができます。

2学期のある日、ナーサリーの出入り口からのぞき込んでいた4、5人の子どもたちに気づき、ナーサリーの先生が中に招き入れてくださいました。散歩に出かけている子どもが多かったこともあり、小さい人は少なめだったようです。幼稚園からお邪魔した子どもたちは、普段目にすることのない遊具に興味津々で、いろいろと触れていました。壁に、長さ14～15センチくらいの薄い木製の棒が数本、少し斜めに互い違いに打ち付けられていて、そこにおはじきを這わせて転がし、落ちる様子を楽しんでいる子どもたちがいました。「もう戻ろう」と声をかけても、なかなかやめようとしません。このようなシンプルな遊びを、年中児もまだまだ楽しむのだと感じ、園での遊びに生かせないかと思いました。

そこから、このマグネットボードのことを思い出したのです。「いつ出そうか」と迷っていたのですが、朝から雨が降り、園庭に遊びに出られない日に子どもたちに声をかけ、試してみることにしました。最初は、手に取ったパーツを張り付けていましたが、そのうち形や模様になっていきました。ある子どもが、8センチくらいの棒状のパーツをつなげ

て坂道を作り、丸いパーツを裏返して転がすことを発見しました。この転がして遊ぶことが広まり、さらに長いコースやナーサリーの壁のような互い違いのコース、棒状以外のパーツも組み合わせた複雑なコースも作り出していきました。集中し、長い時間夢中に取り組む姿に、教師は感心するばかりでした。

子どもたちは遊びの中で、いろいろな人や物や出来事とかかわりあいながら生きています。友達や年長児がしている遊びを見て始めることもありますし、教師である私たちから投げかけることもあります。どの遊びにおいても、かかわりの中で、さらに豊かな発想が生まれたり、戸惑いの中から新たな試行が生まれたりしています。

感嘆するばかりの私ですが、ひとつ心に留めていることがあります。それは、10年ほど前に大学の研究者と一緒に、遊びをビデオに録り、振り返りを行ったときのことです。ごっこ遊びに興じる男児6、7人のやり取りの場面で、一人ひとりの子どもが、精いっぱい自分の気持ちを言葉や態度で表そうとしている姿に、ビデオの映像を通して出会い直しました。なんとなくわかっているつもりになっていたことや思い違えて捉えていたことがたくさんあったことに気づかされました。この共同研究を通して、自分の保育を省察することの大切さをあらためて確認することにつながりました。

今回取り上げた年中組の遊びに見られるつながりや面白さを受けとめ、園ではいくつものことが編み込まれて生活が営まれていることを忘れずに、夢中になれる時間や物などを保障する大切さをあらためて思いました。

子ども学探訪

倉橋惣三との対話⑨
子どもの「夢中」をいかに見取るか

浜口順子
（大学教員）

子どもが「夢中」になるとき

子どもが無心に遊ぶ姿を、大人は昔から「戯れせんとや生まれけん」とほほ笑ましく見守り、いかにも子どもらしいものとして捉えてきました。最近の幼児教育学の世界では、幼児が「安心感（well-being）」をもって生活し、遊びや活動に「集中・没頭（involvement）」できているかで、保育の質が評価できるという理論がよく知られています。つまり、幼児がじっくり遊び始めるには、まずその子どもの存在自体が受け入れられ、安心して過ごす環境が必要です。そうして、周囲の世界（モノや人）へ働きかける能動性が生じ、触ったり、話しかけたり、移動したりしているうちに、知らず知らず何かに集中して取り組んでいる状態になります。「集中・没頭する」を意味する involve という動詞には、「いつの間にか巻き込まれている」という意味が含まれています。意識的に自分をそのような状態に入れるのではないという点が、幼児教育において特に重要なのだと思います。

保育において求められる子どもの「夢中」という状態は、むろん文字通りの「夢の中」ではな

浜口順子（はまぐち じゅんこ）
お茶の水女子大学教授。本誌編集主幹。

く覚醒状態の中で起こります。一心に遊んでいる子どもは現実的です。私が幼稚園の観察を始めた頃、砂場で幼児が「どうぞ」と砂団子を私に差し出してきたので、幼児のイマジネーションの世界を壊してはいけないと戸惑いながら、「いただきます」と言って口元すれすれまで団子を持っていきました。すると「だめだよ、ほんとのお団子じゃないから」と、その子は当たり前のように言ってまたお団子を作り始めました。幼児は夢中に遊んでいても、夢と現実の間を自由に行き来していると実感したのですが、別の表現をすれば、イマジネーションと現実を別のものとする考え方が大人側の固定的な思考法なのであって、人が現実認識を形成する過程では想像力が不可欠であるということになります。

倉橋惣三の「本真剣」

倉橋先生も子どもが夢中になって遊ぶ姿がもっとも大事であると言われていますね。「本真剣」という言葉がそれに当たるのだと思います。

我らが子供に向って希望することのうち、何よりも一番大切としている事は、物事本真剣な子供、本真剣になれる子供になってもらいたいということである。（略）本真剣ということは、……全心全力を挙げて一定時内ただひとつのことに集注しているということになる。これを裏からいえば、浮心でないことである。ふた心でないことである。（略）物事を浅く上滑りしか出来ない子供を、我等はもっとも憂い悲しむのである。（略）ところで、一時一事というのは、一時に甲を思い乙を思わぬということである。ところが思っている事柄は、甲だけであっても、真の集注、真の本真剣といえない

ことがある。これは他でもない。甲を思っている我をさらに他の我が思っている時である。この場合、我は二つに分れる。たとえば花を見る我と、さらにその風流な我を見ている我とになっている。（略）むしろ一層甚しい不集注であり、また不真剣である。

（『倉橋惣三選集 第二巻』フレーベル館 1965年所収『幼稚園雑草』から pp.212 - 213）

真剣の上に「本」がついて「本真剣」。今はあまり聞かない言葉です。おそらく、倉橋先生も「大人の世界で普通に言うような真剣ではありませんよ。子どもの真剣は、子どもの本性。大人のそれとは程度も質も、そして意味も違うのです」と言いたかったのではないでしょうか。

1937年の『キンダーブック』（倉橋先生が編輯顧問の一人）の「ヨイコドモ」特集（第10輯第1編）の中に、動物園遊びのキリンを、保育室で女児が箱や紙を使って製作している場面が描かれたページがあり、そこに「本真剣」という題名がついています。ちょうど、キリンの顔に目を書き入れようと意識を集中している仕上げの瞬間です。「サイゴハ　カオデス。ハナカイテ、オメメヲ　カイタラ　イキテキタ。ホンキデ　カイタラ　イキテキタ。」

子どもが一心に集中して物事に取り組むときに、子ども一人ひとりの世界が生き生きとした生命を発揮するということ。その世界が子どもの中で息吹き始める瞬間瞬間を、そばにいる保育者が見取れるかが、幼児教育を豊かなものにするためのポイントなのではないでしょうか。

「夢中」の周辺を見取る

一般的に、子どもの「夢中」や集中度などは、長い時間一つのことをやり続けている、という

ような、外から見えることのみで判断されがちです。しかし、倉橋先生の「本真剣」には、子どもが「ふた心でない」こと、つまり、その子の自我が、自身（「I」）と、自分を「me」として客観視する自分とに分かれていないかを厳しく見取る姿勢が要請されています。5歳前後の幼児にとって、自分が外からどう見えるかを気にするような自己形成の在り方は時期尚早だという考え方に立っているのだと思います。これは、現代においてほとんど注目されていない、児童心理学者倉橋惣三らしい視点であると思います。

子どもの夢中を保育で実現するには、夢中につながる環境、つまりそこに至る周辺的な状況、また一見、夢中という状態とはかけ離れてはいるが、子どもがリラックスして幸せそうに見える状況を大切に育てることが重要です（図参照）。一人で手持ち無沙汰に見えても外の世界へ触角を伸ばしているか、お友達と一緒にいることを保身でなく真に楽しんでいるか。そのような幸せな状況の先に、ふと「形」「材質」「匂い」「音」「色」などのモノ世界と、子ども（たち）の身体が呼応して夢中の種に出合っていくことが多いのです。大人による外的な指示・評価などによるその子らしくない、いわば「擬制夢中」を、「夢中」だと見過ごしてはいないか、保育者には厳しい省察が求められます。

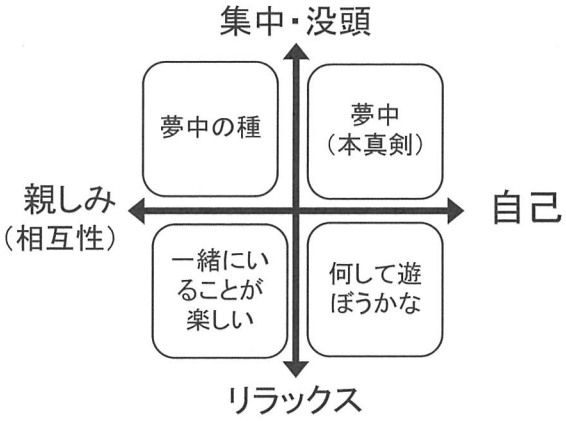


図　「夢中」を見取る保育者の姿勢（2018、浜口）

論考

未来の子どもたちに自然を残す

三宅もえ
（公務員）

びわ湖のほとりで、環境に関する仕事をしています。小さい頃から生き物が好き。とはいえ、幼少時は大阪のマンション暮らしだったため、生き物とふれあう機会は多くはありませんでした。おまけに運動神経が鈍いため、素早い動きの生き物には触れることもできず。昆虫少年だったような方々と比べると、生き物好きを名乗るのがはばかられるほど、何もできない、何も知らない私です。

それでも、ダンゴムシを拾ったり、カタツムリをつまんだり、羽の生える前の飛べないコオロギを捕まえたり、私なりに生き物とのふれあいを楽しんでいました。また、そうして捕まえた生き物をプラスチックのケースに入れて自宅で飼育していると、さまざまな発見がありました。例えばダンゴムシの場合、体の前と後ろを分けて半分ずつ脱皮すること、餌として煮干しをやるときれいに骨だけ残すこと、生まれたばかりの子ダンゴムシは真っ白なことなど、数え上げると切りがありません。ダンゴムシの雄と雌の見分け方を知っている幼児が一体どれほどいるでしょう。図鑑を読んでもなかなか覚えられない知識ですが、こうして自分で発見したことは、大人になった今でも鮮明に覚えています。

現在、1歳8か月の息子がいます。日々成長

三宅もえ（みやけ もえ）
2010年、滋賀県庁入庁。2012年に環境行政職として初めて自然環境を扱う部局に配属。生物多様性戦略の策定等に携わる。

する息子はつくづく面白いなあと思います。道を歩いていると、思わぬところで「おっ！」と声を上げ、うれしそうに何かを追います。それは小さなカエルだったり、アリだったり、トンボだったり。慌ただしい毎日の中で、大人になった私たちでは気にも留めないようなものばかり。日常生活はこんなにたくさんの生き物に囲まれていたのだと驚かされます。まだ、たっちもできない頃、お外遊びの大好きな息子が最初に発した言葉は「クワックワッ（カエルの鳴き声）」でした。小さな身体から発せられる大きな鳴き声は、息子に強烈な印象を残したのでしょう。大人になる過程で忘れてしまうであろうこの驚きを、感動を、できる限りたくさん経験させてあげたい。それが今の私の願いです。

見慣れない生き物を見つけたら

自然環境に関する仕事をしていると、さまざまな電話がかかってきます。

「道にヘビがいます～！」と、今にも泣きそうな声。どんな大蛇かと確認に行くと、太さ1センチにも満たない赤ちゃんヘビでした。田舎ですからヘビもいます。日なたぼっこでもしていたのでしょう。ヘビは変温動物といい、気温に合わせて夜に体温が下がってしまうので、午前中は暖かい場所で日なたぼっこをしていることが多いのです。身体が温まったら自分でどこかへ行くでしょうから、どうか見守っていただきたいものです。

「見たこともないクモがいる。毒グモかもしれない」。報道等で海外から入ってきた毒グモが話題になると、比例するように通報も増えます。実際はそのほとんどはジョロウグモという日本のクモでした。黄色のお腹がおどろおどろしく見えますが、たとえかまれたとしても、人に影響はないとされています。

ヘビもクモも、苦手な人がいることはよくわかります。知らない生き物で、危険な可能性があるのであれば、むやみに近寄らず、専門機関に通報するのが賢明です。ただ、彼らも自然界

の一員であり、その重要な役割を担っています。彼らが生息できるということは、豊富な餌のある、豊かな自然環境が維持されている証しでもあります。気持ち悪い、邪魔などの感情でやみくもに拒絶するのではなく、まずは相手を知ること。そして、多様な生き物を許容できる世の中を目指してはいけないでしょうか。

絶滅するということ
～人と自然の未来を考える～

２０１９年1月、環境省による絶滅危惧種のリストが見直され、１９８１年に野生絶滅したトキが、絶滅危惧ＩＡ（ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの）へとランクダウンされました。中国からの個体を迎え入れての繁殖・野生復帰の試みが功を奏し、野生下での成熟個体が出現する状態が5年以上継続していることを受けての見直しのようです。こうした取り組みは素晴らしいものですし、関係者の方々の努力には頭の下がる思いです。しかし、たとえ野生復帰の取り組みがこのまま順調に進んだとしても、自然界で一度絶滅した種が復活することはありません。少なからず人為を受けて絶滅に追いやられた種がいた事実を忘れることのないよう、私たちは胸にとどめておくべきだと思います。

絶滅する生き物がいる一方、数が増えるなどして、人とのあつれきが生じている例もあります。私の住む地域では、サルやイノシシにより農作物が食べられてしまう被害、シカの列車との衝突、また稀（まれ）にクマによる人身被害等が発生し、いずれも深刻な問題となっています。また、都市部においては、カラスがゴミを荒らす、人を攻撃するなどして駆除の対象にもなっており、集団で夜を過ごすムクドリは大量の糞やけたたましい鳴き声などで近くに暮らす人々を悩ませています。こうした話を聞くにつけ、「生き物が好きだから守りたい」では済まない、課題の大きさを認識します。

時代とともに自然は変化し、人の暮らしも変化します。自然と人とのかかわりも、やはり変化するものです。常に過去が良いとは限りません。それでも、過去を振り返り、関係を見つめ直しながら、これからの自然とのかかわり方を模索していくことが、より良い関係を築く上で重要だと思います。今の日本では、自然は倒すべき相手でもなければ、物質的に利用・搾取するだけの相手でもありません。利用の方法は多様化し、観光として、癒しとして、時には教育・福祉の現場として、自然はさまざまな恵みを私たちにもたらしてくれます。

自然は本来、少々の変化に対しては弾力性があり、元の状態へ戻る力をもっています。しかし、人間の活動が活発になるにつれ、自然の元に戻る力を超えるスピードで変化が生じるようになりました。生物種の絶滅などに見られるように、ある閾値を超えると自然の変化は不可逆的なものとなり、一度生じた変化は戻すことができません。取り返しのつかないところまでいってしまう前に行動を起こさないと、未来の子どもたちに自然は残せないのです。

「守って活かす」。これが今後の私たちの基本スタンスになっていくのではないでしょうか。今、自然を維持・回復させるためには、ほんの少し、人の助けが必要です。しかし、人を遠ざけ、手つかずの状態で囲い込むことは、必ずしも自然の助けにはなりません。日本という狭い国土の中で、私たちは古くから自然の中に入り込んで生活をしてきました。逆にいうと、自然は人からの干渉を受けながら維持されてきたのです。このような自然を立ち入り禁止にしてしまうことは、自然を守るどころか、荒廃を押し進めてしまうおそれもあります。自然の状態を見ながら、必要に応じて手を入れ、そして過度にならないように気を配りながら利用する。そんな自然とのかかわり方ができれば、人と自然の未来が見えてくるように思います。

報告

ギリシャの子どもたちの日常

マリア・パパスターヴル（外国語講師）
翻訳・構成／松田こずえ（大学院生）

ギリシャにおける義務教育は、5歳の幼稚園から始まる。6歳で小学校、13歳で中学校、16歳で高校、18歳で法律上は成人を迎え、大学に進学する。子どもたちにとって重要であると考えられていることは、「遊び」（遊具、方法、冒険）と、「学び」（学校、ルール、知識）である。

幼児期の子どもたち

ギリシャでは外で仕事をしている両親が多く、子どもたちの多くは5歳の幼稚園入園前は保育園や私立のナーサリーに通う。金銭的な理由により祖父母の家に預けられる場合もあり、その数は次第に増加している。保育施設への通園経験がある子どもは、幼稚園入園後も容易に園の生活リズムやスケジュールに合わせることができる。しかし祖父母に預けられていた場合には子どもの経験は不足しがちであり、「社会化」が遅れる心配がある。

子どもたちは通常7時45分から15時頃までを保育施設で過ごし、帰宅後に別の習い事に出かけることはあまりない。親が疲れるため、子どもを連れて再度、外に出かけたいとは思わないからである。その結果、子どもたちは、家に遊び相手も話し相手もなく手持ち無沙汰で、結局はテレビの前に長時間座り続けることになるか、もしくはタブレットを手に、年齢に合わな

Maria Papastavrou（マリア・パパスターヴル）
パトラス大学大学院（ギリシャ）で幼児教育を専攻、
修士課程修了。現在、英語教室講師。

い内容の番組や情報を見続けることになる。夕食後は通常、早い時間に就寝するが、日によって遅い時間まで起きていることを許されることもあり、その場合は、翌日に眠たい目をこすりながら、保育施設での活動に渋々参加することになるのである。

5歳で幼稚園に入園すると状況は変わる。教育省によって、幼稚園は朝8時15分から13時までと定められている。年齢に応じたカリキュラムに則(のっと)っており、特に小学校に向けた準備教育が重視されている。幼稚園とは別に、習い事をさせる親もいる。これは子どもが小学校入学後に困らないように準備するためであり、例えばスポーツ（サッカー、バスケットボール、スイミング等）、芸術（歌、ダンス等）などである。しかし、子どもとの小旅行や、遊び、活動を共に体験しようとする親はほとんどいない。質の高い時間を子どもと一緒に過ごすことの重要性について理解している親が少ないからである。

家庭の様子

ギリシャの幼児は、保育施設や幼稚園に通う以外の時間は、両親や祖父母と一緒に、教育的に有意義に過ごしていると考えられている。

集団保育の場で子どもは同年齢の友達と共に社会を築き、新しい素材に出会い、実際に手を動かし製作し、課題の解決に興味をもって取り組んでいる。親もそのことを理解してはいるが、残念ながら、家庭においても同じような過ごし方を心がけるかというと、必ずしもそうではないのが現実である。子どもらしく遊び、会話し、歌い、体を動かすことを歓迎することもない。むしろ、親が子どもに要求することはその逆である。「大人は忙しいのだから」邪魔をせず、じっとしているようにと言い聞かせるのである。これはエネルギーと好奇心に満ちた幼い子どもにとって、到底無理なことであり、結局、親は子どもにテレビやタブレットの画面を与え、それを見せて静かにさせることになる。

小学校入学後の子どもたち

年齢が上がるに従い、ギリシャの子どもたちには自由な時間が少なくなる。小学1年生のときに、ほぼ全員の子どもが英語の課外レッスンを受け始め、中学卒業もしくは高校初期まで継続する。相当な時間が英語習得のためにつぎ込まれる。中には第二外国語（多くはドイツ語もしくはフランス語）のレッスンを追加で受ける生徒もいる。語学以外にも、ほぼ全員の子どもが、サッカー、バスケットボール、スイミングなどのスポーツ活動や、絵画、歌唱、ダンスや楽器などの芸術系の活動に参加する。課外活動を増やした結果、子どもたちは常に多忙であり、十分な休息、睡眠や、満足いくまで遊ぶための時間などは残されていない。わずかな空き時間にはタブレット等の画面を見て過ごし、それをささやかな息抜きとするのである。これはテクノロジーに慣れ親しんでいる現代の子どもたちを思えば、ごく当然の姿であるだろう。

中学校や高校では、授業時間が増えるのに加え、試験のために学校外での課外授業も必要になり、長時間机に向かう生活になる。必然的に、習い事を辞めざるを得なくなり（または習い事を続ける場合には、なおさら学校の勉強に熱心に取り組む必要がある）、進級試験に合格するために必死に勉強する。山場は高校最後の卒業試験であり、この期間には子どもたちは大きな不安とプレッシャーを抱えて過ごすことになる。

今日での状況は悪化している。ギリシャにおける学校は、生徒にとってさえもその信頼が失われつつある。学校を退屈な場であると感じ、「真面目に励む」ことや「成功する」、または「夢をつかむために」といったことを考えようとしない生徒が増加している。自分の将来設計について真剣に考えようとしない。熱心に学業に励むことを生徒に期待しない教師と親にも、責任の一端はある。日常的に学校の規則を破り、簡単な手続きにすら従わない生徒もいる。

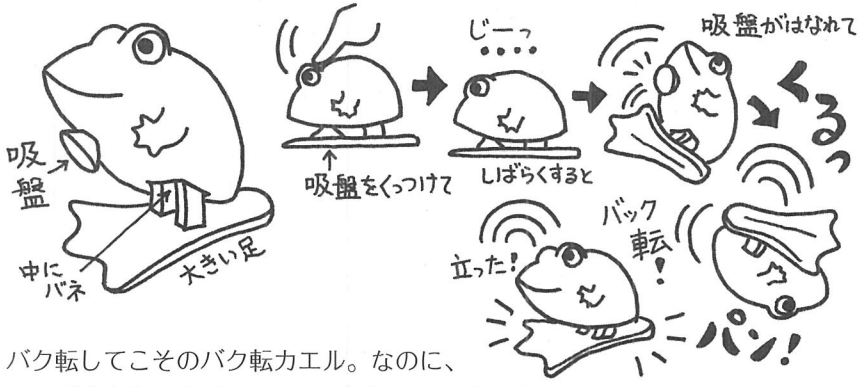
私の願い

全般的に見て、ギリシャの子どもたちの日常生活はおそらく最善のものとは言えないが、子どもたちはそのことに気づいておらず、改善を試みようとする人もいない。仮に子どもたちの親が、より多くの機会を子どもたちに提供しようとするならば、状況は異なるのかもしれない。

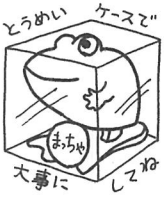
ギリシャの子どもたちは、子どもであることを少しずつ忘れつつあるのではないかと私は考える。このことは私の母国であるギリシャのみならず、世界中の子どもたちに当てはまると危惧している。子どもたちはますます遊ばなくなり、自然や子どもたちを取り巻く環境から離れていく。テクノロジーに依存しているため、年齢や精神的、心情的な成長段階にそぐわない内容のもの、つまり、戦争、暴力、苦痛、虚偽、恋愛などの内容に触れることになる。これらにより、子どもたちの価値観、感情や理解、人との会話やかかわり方は影響を受けることになる。その結果として、子どもたちは心からの幸福感や笑い、友情、楽しさを味わう機会を逃し、ますます孤立し孤独な生き方を受け入れていくのである。子どもらしい無邪気さに別れを告げ、自分の個性を磨くより前に、自分らしさそのものを失っていく。

私は次世代や私たちの社会の未来のために、状況が少しでも良くなるようにと願っている。つまり「子どもたちはそれぞれ違う種類の花であり、みんなで一緒にこの世界を美しい庭園にする」こと。それが私の望みである。願わくは、子どもたちという花々がこの先、もっと大切に育てられ、子どもたちの望むままに可能性という花びらを開かせ、それぞれに大輪の花を咲かせることを……。

例えば「バク転カエル」。こんなおもちゃです。



バク転してこそのバク転カエル。なのに、
これが立たない！ 立たない！ 立たない！ 立たない！
20回試みても立たなかったらダメですよね。５回連続でバク転できたら合格にしています。そんな優れ者がいるのに、それと見た目も仕掛けも全く同じなのにどこが違うんだろう？なんで立たないの？そんな思いで店の奥でひたすらカエルを審査する私。ひどい時は24個中10個が失格。なんと４割近くがダメなのですよ。ダメなやつは廃棄です。合格者のみを磨いて良いケースに入れて、おしゃれな名前シール貼ってます。黄色はバナナちゃん、水色はミルクちゃん、緑はまっちゃ（抹茶）ちゃん。お菓子用のラベルなのでね。一番人気は、まっちゃちゃん！



まあ選ばれし者たちですから。見栄え良くパッケージングもしてあげてますし、普通の駄菓子屋さんよりは少々お高いかもしれませんが、ま、面白さへの値段ということでして、中古なればこそお宝的価値も出てくるというかね……ご了解くださいね、ホッホッホ。と理論武装して、ちょっと稼いでいるわけです。

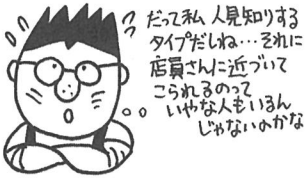
そんなある日、失格したカエルたちを廃棄しようとして、
なんとなくまた試したら……
なんと３匹が完璧に５回連続バク転成功したじゃないですか！
敗者復活！ おめでとう！ でもどういうこと？
捨てられたくないので夜中に必死に自主トレでもしたのでしょうか？？？
おもちゃってきっと命がありますよ。だからちょっと不思議なことも時々起こるんです。

鎌倉おもちゃ屋物語 その2

くろすかずきよ

面白駄玩具の紹介と
新米おもちゃ屋の
どたばたエッセイ！

アナトールカフェに置いてあるぬいぐるみ系は全部パペット、
手を入れて動かす人形です。オーナーのひげだるま山川さんは
お客さんが来るとそれを手にはめてセールストーク。
リアルな作りのそれらをまるで生きているように動かすのが
この道15年の山川さんの得意技。お客さんは一気に打ち解けて
結構お高い商品なのに売れていきます。
新米の私はまだそんな度胸がなく、店の奥から眺めてニコニコ相づち打つばかり。
学生や研修会の保育士さんにならもう40年以上平気で人形劇を演じてきたのですが、
見たい、聞きたい、学びたいのがはっきりわかっている人ならいいけど、
ただ店にふらっと入ってきた、目的も興味もわからない赤の他人にお人形持って
話しかけるのって相当勇気がいるのですよ。
いろいろと言い訳しながら店の奥で私がしているのは
手作り商品の製作と駄玩具の検品。
そう、検品しなきゃいけないんです。



こういう駄玩具の問屋は東京にあまり無いので
私は大阪まで仕入れに行ってます。
問屋なので１個ずつではなくダース単位で
大量に仕入れてくるのですが、
駄玩具って時々おかしなものが
まざってるんですよ。

前回紹介したヘビゴマでも、軸の先がさびていたり、中に仕込んだ磁石の接着剤
が分厚くて磁力が弱く、ヘビがくっつかないのがある。ひどいのはヘビが入って
いなかったりする！
これじゃあヘビゴマじゃないじゃん！子どもが自分のなけなしのお小遣いで買っ
たのがそれだったらかわいそうでしょ。だからやっぱり検品します、一つ一つ
袋開けてね。その時点で中古品になるわけですけど、いたしかたない。
衛生法とか安全法とかの検査はクリアして袋に明記されているのですが、
それとは別の、おもちゃがちゃんと機能するかどうかの検査が
十分されていない気がしますね。

黒須和清　1955年東京生まれ。横浜在住。
洗足こども短期大学教授として手作りおもちゃや人形劇
を教えるかたわら、ペーパークラフトや執筆活動、研修
会講師の仕事などで忙しい。

イン研究本部 ライフデザインレポート(193), 16-27.
厚生労働省(2017)「保育所保育指針」
https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000160000.pdf
松本 由美子・後藤 知子・小林 豊子・石橋 尚子(2017)「室内遊びにおける保育環境の重要性(1) －1歳児の遊び場面での環境構成を考える－」椙山女学園大学教育学部紀要 *10*, 301-311.
文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館.
内閣府・文部科学省・厚生労働省(2018)『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館.
仙田 満(1992)『子どもとあそび －環境建築家の眼』岩波書店.
仙田 満(2009)『こどものあそび環境』鹿島出版会.
仙田 満(2016)『人が集まる建築 －環境×デザイン×こどもの研究』講談社現代新書.
正田 博之・山田 あすか(2015)「就学前保育施設における園庭の環境づくりとこどもの遊び様態についての研究」日本建築学会 *80*, 714号, 1765-1773.
多田 幸子(2015)「幼児による遊び場の環境構成に関する研究」山梨県立大学人間福祉学部紀要 *10*, 41-50.
竹井 史(2012)「子どもの土遊びを広げる物的環境としての土素材の工学的研究」保育学研究 *50*, 3号, 8-17.

◆研究論文を募集します◆

― ピアレビュー（査読）の上、掲載します ―

本誌の巻末、横書き部分の「探究」ページに掲載する論文を募集します。
【テーマ】 子ども、保育、幼児教育に関するもの
【文字数等】 本文：400字詰め原稿用紙35枚程度（写真・図表、文献、注を含む）。本文はワード原稿で作成してください。編集上適宜対応しますが、投稿予定の方は下記のアドレスまでメールでご相談ください。
【締め切り】 随時募集します。
【送付先】 本誌編集委員会 Mail:youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

今回は、O大学の構内かつ園庭という半公共的な外遊びの環境を研究対象とした。広場は、O大学の職員や学生なども利用する場所であるが、2017年12月頃からは、Aこども園の第二園庭として子どもたちが外遊びをより楽しめるような環境構成が本格的に行われるようになった。具体的には、2017年12月頃に廃土を利用した山を作り、翌年６月中旬にはAこども園の職員と保護者が共同で製作した小屋が運び込まれ、翌年10月中旬には丸太を新たな遊具として置く、などである。

しかし、公園は公共的な場であるために、子どもたちが遊ぶために環境を変化させるのには限界があることも多い。例えば、子どもが自由に地面に穴を掘ったり、固定遊具が多い公園の中で子どもたち自らが好きなように遊具を動かすなどといったことはできない。さらに、保育者が新たに遊具を設けたり、植物を植えたりするなどの環境構成を行うことも困難である。

公園が園庭の代わりとして使われることが増えた今、園庭ではない公共的な場においても子どもが自由にのびのびと遊べるような環境構成を行うことが必要である。また、自然を生かした環境において、その環境の変化に触れながら、子ども自らが遊びの場に働きかけ、変化させることによって、外遊びはさらに発展する。

５．結論

本研究では、外遊びの保育的な意義を検討し、外遊びにおいて重要な環境構成について明らかにした。子どもが外遊びを楽しめるようにするには、園庭や公園を含む屋外空間の環境構成により一層配慮する必要がある。外遊びの機会と環境が失われつつある今、園庭だけでなく地域の公園などにおいても、子どもにとって本当に魅力的な遊び場とは何かを考えながら、環境作りを行うことが重要である。

謝　辞

研究にご協力いただいたAこども園とBナーサリーの皆様に心から感謝申し上げます。

参考文献

張 嬉卿・仙田 満・大野 隆造・仲 綾子(2004)「園庭におけるあそび行動よりみた遊具・広場計画に関する研究」ランドスケープ研究　日本造園学会　*67*, 5号, 429-432.

河邉 貴子(2006)「園庭環境の再構築による幼児の遊びの新しい展開 －ウッドデッキの新設をめぐって－」保育学研究　*44*, 2号, 139-149.

北村 安樹子(2010)「子どもの外遊び空間と地域の住環境」第一生命経済研究所ライフデザ

コンクリートで覆われ、自然が少ない公園においては、環境の変化が乏しく、子どもたちが自ら働きかけて環境を変化させることも難しい。

一方、広場では、よく園庭や公園にあるようなすべり台やブランコ、ジャングルジムといった遊具はなく、人工の遊具は小屋とロープのみである。その他は山があるとともに、植物が多く生えており、自然を生かした環境となっている。一見、遊び道具が少ないために子どもたちにとってはつまらない場のようにも見える。しかし、観察を行う中で、子どもたちは遊具が少ないからこそ自分で遊びを生み出していた。さらに、広場での遊びに慣れてきた9月頃からは、道具や丸太などを使って、自分たちが遊びやすいように環境を変化させることを楽しみ、飽きることなく遊んでいる様子が見られた。

このように、子どもたちの働きかけによって変化させることができる環境を作ることは、遊びの発展性を確保するために重要である。子どもの環境に対する働きかけにより、広場はさらに変化を遂げ、遊びの発展が進んでいった。よって、遊び方がある程度決められた固定遊具を置いたり、遊び場を安全かつきれいに整備したりするだけでなく、あえて手つかずの場所をそのままにしておくということも、子どもの遊びにとっては遊びを生み出す余地を作るために重要であると考えられる。

4-2. 外遊びの意義

次に、改めて外遊びが持つ意味についても明らかにすることができた。前述したような自然とのふれあいや動植物との出会いを生むだけでなく、室内では経験できないような遊びをすることができる。広い場所で走り回ったり、山を登ることを楽しんだり、少しスリルのある遊びに挑戦したりする。さらに、自然に満ちた屋外の遊びでは、偶然性が遊びをさらに面白くさせる。例えば、強い風が吹くことにより、普通のお家ごっこが地震ごっこに変化する。こういった偶然に満ちた出来事に遭遇したとき、子どもたちの目は生き生きと、より輝きを増す。このように、予期しない出来事が起きるというのも屋外での遊びならではの面白さであり、この偶然性と子どもの発想力が合わさることにより、遊びがさらに発展していく。このように、子どもたちにとって外遊びは、室内遊びとは違った魅力にあふれていると考えられる。

4-3. 半公共的な外遊び空間の重要性

保育における遊びについて、近年では園庭が減少・縮小する中、代わりに公園が外遊びの場として使われることが多くなってきている。そこで、今後は子どもがより自由に遊べるような屋外空間を作っていくことが求められる。

Aこども園の子どもたちは水路に水を流して遊んでいたと考えられる。E子たちは水路の中で滑ったり、靴に泥がついたりするなどといった感触も楽しんでいるようであった。上の年齢の子どもたちの働きかけにより環境が変化し、その変化の形跡が残っていたことで、下の年齢の子たちにとっての新しい発見と遊びにつながったと言える。

このように、広場の地面は季節によって自然に変化することもあれば、子どもたちの働きかけによって変化する場合もある。地面の変化によって、子どもの遊びが発展していくということがわかる。

4．総合考察

今回の研究により、室内遊びとは異なる外遊びの魅力とその保育的な意味に加え、外遊びにおける環境構成の重要性が明らかになったと言える。以下にその詳細を述べる。

4-1. 外遊びの環境構成

本研究では、外遊び環境を子どもにとってより魅力的にしていくための工夫と環境構成について明らかにすることを目的とした。これについては、まず、近年特に都会で失われつつある自然を最大限に生かした環境を作ることが重要であると言える。自然豊かな環境においては、季節や天気などによって環境が絶えず変化する。また、様々な動植物との出会いを生み、子どもは新たな出会いに感動しながらいのちの大切さに気づいていく。さらに、木の枝、葉、土などの自然素材が多くあることによって、子どもの遊びや表現活動に広がりが生まれる様子が見られた。広場は自然を生かした場であるため、季節による変化が非常に大きい。春には花が咲き、夏には緑が生い茂り、秋には葉や実が落ちたり、といった視覚的な変化とともに、季節によってふれあう動植物が変わり、草が伸びることで地面を歩く感触が変わる、雨の日の後には土の地面が軟らかく滑りやすくなる、といった物理的な変化も見られる。このように、遊び場が絶えず変化する様子を子どもたちは敏感に感じ取り、それを味わいながら遊びに生かしていた。

加えて、子ども自らが環境に働きかけ、変化させることができるような遊び場を作ることも重要である。室内、特に狭い保育室の場合は、部屋そのものの構成を変えることは難しく、ほとんどの場合は遊んでいた場所や制作途中のものをそのまま全て残すことはできず、片付けてしまう。また、学年やクラスなどによって遊び場が分けられている場合も多いため、異なるクラスの遊びが相互に影響することも少ない。また、屋外であっても、その場の大半が固定遊具で占められており、地面が

＜考察＞

この日はとても風が強い日であったため、Ｐ男とＯ男はダンゴムシを風から守るためにダンゴムシの巣を作っていたと考えられる。Ｐ男とＯ男のダンゴムシに対する思いやりが見て取れる。

このように、広場は自然が多くあるために、様々な虫と出会うことができる。子どもたちは、思いがけない虫との出会いに目を輝かせ、虫に対する思いやりを持ちながら虫との関わりを楽しんでいる様子が見られた。

3-2-2. 地面

【事例５：地面にできた跡で広がる遊び（２歳児、10月25日）】

Ｅ子、山の上に水路の跡ができているのを見つけ、「見て！」と声を上げる。おそらく、Ａこども園の上の年齢の子が前に作った水路のようなものがそのままになっていたようだ。Ｅ子、バランスをうまく取りながら水路の跡の中を歩く（図3-6）。すると、Ｎ子、Ｔ子、Ｍ子も水路の跡の中に足を入れて歩いていく（図3-7）。

図3-6 水路の跡を歩くＥ子

図3-7 Ｅ子の後ろを歩くＮ子、Ｔ子、Ｍ子

＜考察＞

この事例は、前の日にＡこども園の子どもたちが、山から小山の方へ川を作る遊びをしていた跡が残っていたことで、Ｂナーサリーの子どもたちが興味を持ち、新しく遊びが生まれる場面である。Ｂナーサリーの子どもたちは細い道をバランスを取りながら楽しそうに歩いていた。また、水路の土が軟らかくなっていたことから、

＜考察＞

この事例は、Ｂナーサリーの２歳児が、広場の中央にあるマンホールの穴に興味を持ち、穴に植物を入れていく場面である。Ｔ子はマンホールの穴にものを入れる遊びを何分も長い間続けていた。マンホールの穴は小さいため、中に入れた物の様子は見ることはできないが、穴にものを入れるという行為を楽しんでいたと考えられる。Ａこども園の子どもたちにはあまり見られない遊びであるが、Ｂナーサリーの子どもたちにとっては、マンホールが大事な遊び場の一つであるようだ。

この事例から、本来の遊具ではない場所やものに子どもたちが興味を持ち、遊びを生み出している様子がわかる。このように、子どもたちは決して、置かれた遊具だけで遊ぶのではなく、自ら遊びの場を発見し、その環境を最大限に生かしながら遊びを生み出していくということがわかった。

3-2. キーワードごとに見る遊び

以下では、エリアを超えて見られた項目について、キーワードごとに示す。3-2-1では広場で見られた虫との関わりについて、3-2-2では地面の変化による遊びの発展について分析した。

3-2-1. 虫

【事例４：ダンゴムシの巣作りから見る虫への思いやり（４歳児、４月６日）】

Ｐ男とO男が、山の斜面の上で木の枝や石を集めている（図3-4）。Ｐ男が「ダンゴムシの家作って育ててる」とつぶやく。Ｐ男が歌いだし、O男もそれに合わせて歌いながら、木の枝や葉っぱを集めていく。Ｐ男が「たんぽぽもつけていい？」と聞くと、O男は「いいよ」と答える。O男が山から離れ、一人残ったＰ男が、観察者に向かって「いまおれダンゴムシの巣作ってる！」「あったまるように工夫してる！」と言う。

図3-4 ダンゴムシの巣を作るＰ男とO男

図3-5 ダンゴムシの巣の様子

探究

図3-2 小屋の上で「地震だ～」と叫ぶA子

＜考察＞

この事例は、風がとても強い日に、小屋における風の揺れを子どもたちが「地震」と例え、地震ごっこを始める場面である。下線部(4) ～ (6)のように、風が強く吹くと、子どもたちは「地震だ～」と叫び、周囲の子どもに呼びかけたり、低姿勢を取るなどして、安全を確保しようとしていた。小屋に壁や屋根がないため、周りの環境の変化を敏感に捉えながら偶然に遊びが発展していく様子がわかる。また、風など屋外ならではの事象によって、室内では見られないようなごっこ遊びの展開が見られる。

3-1-3. マンホールでの遊び

【事例３：マンホールの穴（２歳児、10月18日)】

Ｔ子、保育者に「(草をマンホールの穴に）入れていい？」と聞き、保育者が「いいよ」と答えると、Ｔ子は草をマンホールの穴に入れる。Ｙ子が木の棒を見つけると、Ｔ子も木の棒を欲しがり、保育者が木の棒を拾って渡す。Ｔ子は木の棒をマンホールの穴に入れ始める。また、Ｔ子はマンホールの上にあった草を木の棒で押し込むようにして穴に入れる（図3-3)。

図3-3 マンホールの中に草を入れるＴ子と木の棒を持つＹ子

＜考察＞

この事例は、F男たちが、穴の中に何かがいるのではないかという好奇心から想像力を働かせ、穴を掘っていく場面である。下線部(1)～(3)のように、F男はセミの幼虫、H男はモグラ、W子はヘビなど、子どもはそれぞれ何が穴の中にいるのか想像を膨らませながら、穴を掘る遊びを進めていく。

この事例から、穴を掘るという行為は子どもたちにとって非常に面白く、新鮮な遊びなのではないかと考えられる。近年の保育所の園庭や公園では、硬い地面やコンクリート、砂や礫で覆われた地面が多い。竹井（2012）は、園庭が粗砂や礫を中心として構成されていることを、「園庭の砂場化」と呼んでいる。「砂場化」した園庭の場合、地面が硬いため、子どもの力で掘ることは難しく、遊びが広がりにくいと考えられる。

一方、山の地面は、土でできており軟らかいため、子どもでも簡単に穴を掘ることができる。また、子どもたちはシャベルなどの道具を使うのではなく、木の棒といった広場にあるものをうまく利用して遊びを進めていく。広場は自然に恵まれた環境であるため、長い棒など、子どもがその時々の遊びにおいて求める道具をすぐに見つけることができる。これも、屋外における遊びを円滑に発展させる要因となっていると考えられる。

穴はその日に子どもたちが掘ったものもあれば、もともと地面がくぼんでいた場合もある。このように子どもの働きかけによっても環境が変化するため、次々と遊びが生まれていく。そして、穴の中という未知の世界に子どもが強く惹きつけられ、好奇心や想像力を働かせながら遊んでいる様子がわかる。

3-1-2. ごっこ遊びが生まれる小屋

【事例２：地震ごっこ（４歳児、４月６日）】

この日は風がかなり強く吹いていた。E男とF男が小屋の中にいて、強い風が吹いたとき、E男が「地震だ！」(4)と大きな声で叫ぶ。すると、B子とD子が小屋に駆け寄ってくる。後からA子も「地震よ！」と言って走って小屋に駆け寄ってくる。

A子、B子、D子、E男、F男の５人が小屋の上にいる。A子はE男やB子と話していたが、強い風が吹いてくると、遠くにいるC子に向かって「C子ちゃ～ん、寝なさ～い！」と叫ぶ(5)（地震が起きているから頭を守って伏せなさいという意味）。E男も一緒に「C子ちゃん、地震だから丸まって！」(6)と大声で言う（図3-2）。しばらくすると、再びE男が皆に向かって、「みんな～地震だって！」と叫ぶ。

以下3-1では、広場のエリアごとに見られた遊びの場面について、3-2ではエリアを超えて興味深い遊びが見られた場面について分析した。

3-1. エリアごとに見る遊び

以下、3-1-1では山において見られた穴との関わりについて、3-1-2では小屋がごっこ遊びの場として機能している場面について、3-1-3では、遊具ではないマンホールにおいて見られた遊びについて分析した。

3-1-1. 山における穴との関わり

【事例１：穴の中のモグラ探し（４歳児、４月27日）】

Ｆ男が、山に開いた穴を木の棒で掘り広げながら、「セミの幼虫いるかもしれない」(1)と言う。近くで見ていたＨ男が、「モグラもいるかも」(2)と言う（図3-1）。Ｈ男が、近くにいたＣ先生と穴から去ると、それを見ていたW子が、Ｆ男に「ヘビ？（は穴の中にいる？）」(3)と聞き、Ｆ男は「え～!? ヘビだって！」と言い、W子とＦ男は顔を見合わせ、二人とも興奮した様子で足をバタバタさせ、「きゃ～」と声を上げる。そこに、Ｎ男が歩いて来て、「ヘビどこ～？」とＦ男に聞く。Ｆ男は「ヘビがいるかもしれない」と答え、Ｎ男は穴を見て「どこどこ？ うわぁ、めっちゃ穴開いたね！ ヘビいるかもね」と言う。その後Ｆ男は「長い棒探してくる」と言って山の奥へ歩いて行き、Ｎ男も山に登って行く。そこに、Ｃ先生とともにＨ男が戻って来て、「ヘビがいるかもしれないんだって、毒ヘビ！」とＣ先生に向かって言う。また、Ｈ男、「この中に生たまごが入ってるんじゃないの？」とＣ先生に言い、棒を探しているＦ男の元へ向かう。

Ｆ男とＨ男は再び穴に戻り、Ｆ男が長い木の棒で穴を突く。Ｈ男が「この中に毒ヘビがいるんじゃない？ つついたら出てくるかもしれない」と言う。また、Ｈ男が、近くで見ていたＣ先生に「モグラは穴を掘って巣を作るらしいよ、ということは、ここがモグラの巣穴なんじゃないの？」と言う。そのうち、遊びの時間が終わり、Ｈ男は「モグラまた探そう」とＦ男に言っていた。

図3-1 山で穴を掘るＦ男と見守るＨ男

互作用が見られた子どもたちの遊びの場面をビデオカメラで撮影した。そして、分析の際には子どもの行為に着目し、子どもの表情や言葉、遊びの流れなどを踏まえ、保育的視点から分析を行った。広場の全体図は以下の図１の通りである。

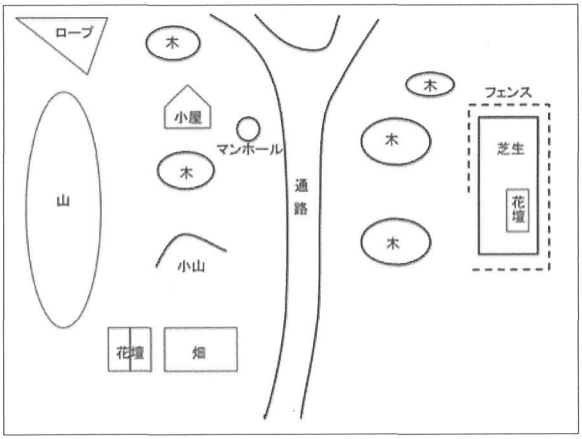


図１　広場の全体図

３．結果と考察

広場における遊びの観察によって得られた事例を、広場の４つのエリア（山、小屋、ロープ、その他）に分けた（図１参照）。さらに、エリアを超えて共通点が見られた４項目（虫、道具、丸太、地面）についてはキーワードごとに分類し、分析した。全38事例の内訳は以下の通りである（表１）。

エリア					
項目	山	小屋	ロープ	その他	計
事例数（割合）	9（23.6%）	5（13.2%）	5（13.2%）	4（10.5%）	23（60.5%）
キーワード					
項目	虫	道具	丸太	地面	計
事例数（割合）	4（10.5%）	2（5.3%）	4（10.5%）	5（13.2%）	15（39.5%）

表１　事例数の内訳

保育における環境の重要性については、「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」及び「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」における領域「環境」において次のように述べられている。まず、ねらいとして「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」「身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする」ということが挙げられており、子どもが自然を含めた環境に対して能動的に関わっていくことが必要であるとされている。また、内容については、自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付くこと、季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付くこと、自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶこと、身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付くこと、などが挙げられている。このように、季節などによる環境の変化を感じながら、自然との関わりや動植物とのふれあいを経験することが子どもにとって重要であるとされている。

子どもたちの遊びと環境についての先行研究として、張・仙田・大野・仲（2004）は建築学的視点から、子どもの遊びの回数や滞在時間などの量的特徴に着目し、園庭における子どもの外遊びの実態を示した。また、保育学的視点から河邉（2006）は園庭環境の一部を再構築することで遊びの発展過程の変化を捉え、園庭における幼児の遊びと空間特性とのつながりを明らかにしている。また、多田（2015）は室内遊びにおいて、子どもたちが環境に自ら働きかけ、自分たちの遊びに必要な環境構成を行うことを明らかにした。しかし、子どもの外遊び環境との関わりを長期にわたって観察し、外遊びと環境構成の意義について明らかにした研究は少ない。

本研究では、子どもの外遊びと環境との関わりに着目し、外遊び空間を子どもにとってより魅力的な場にするための環境構成について明らかにすることを目的とした。また、子どもたちの遊びとその発展過程に着目し、子どもの成長や発達において、外遊び環境とそこで生まれる遊びにどのような意義があるのか、保育的視点から検討を行った。

2．研究方法

本研究では、都内の認定こども園（以下、Ａこども園）の第二園庭（通称：広場）を観察場所とした。対象は、Ａこども園の１～５歳児と、Ａこども園の付近に位置するＢナーサリーの１～２歳児である。広場は、Ａこども園の付近に位置するＯ大学の構内にあるため、Ａこども園の第二園庭であるとともに、Ｏ大学の学生や職員などが通行する空間でもある、半公共的な遊び場である。

観察は2018年３月下旬から11月中旬にかけて週１回程度、計18回行った。時間は、10～11時半頃の午前中である。観察者は広場内を適宜移動しながら、環境との相

論文

半公共的な場における子どもの外遊び環境との関わりと環境構成についての保育的研究

定行　景子*

A Study on the Relationship between children and outdoors playgrounds environment in semi-public places and the Structure of outdoors playgrounds in ECEC

Keiko SADAYUKI

1．問題と目的

近年、都市化が進む中で、子どもの遊び場は限られてきている。公園では、外遊びをする子どもを見かけることが減り、事故の防止や近隣の住民への配慮のため、「ボール遊びをしない」などと、子どもの遊びを制限する公園も少なくない。さらに、最近では待機児童問題を解消するために保育所の増設が行われ、園庭が狭い、または園庭を持たない保育所も増えている。このような保育所にとって、地域の公園は園庭の代わりとして子どもへ外遊びの機会を提供する重要な役目を担っていると言える。

北村（2010）は、子どもの外遊び空間について、都市部に行くほど減少傾向にあることを明らかにしている。さらに北村は、地域に公園が多くあったとしても、子どもにとってみると、その公園が必ずしも自由に遊べる空間であるとは限らないということを指摘し、子どもが自由に遊べる環境を整備するには、公園だけでなく、公園以外の屋外空間の利用可能性にも目を向けることが重要だと述べている。都市化によって子どもの遊び場が失われつつある中、子どもが外で思い切り体を動かして遊ぶ機会を確保するため、公園や園庭といった外遊び空間における環境構成の重要性が増してきていると言える。

仙田（2016）は、子どもの遊び環境によって開発される能力として、①体力、運動能力などの身体性、②人間関係に関わる社会性、③自然あそびから培われる感性、④あそびを作り出す創造性、⑤自由な意思で挑戦する挑戦性の５つを挙げている。子どもにとって外遊びは、様々な経験や能力を得るために重要なものであるにも関わらず、近年の都市化や環境の変化により、子どもがこれらの能力を得る機会が限られてきていると言える。

＊（さだゆき けいこ）お茶の水女子大学生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座

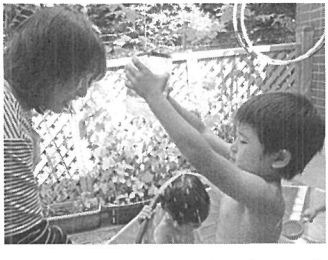
探究

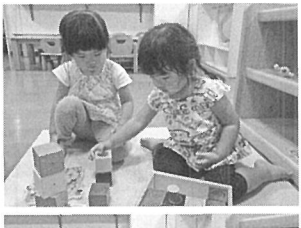
◇ナーサリーこぼれ話◇

「照れくさい」という人間味

いずみナーサリーは、0歳から年度内に3歳になる2歳児までの子どもたちの通う保育施設ですが、3年ほど前から、卒園児や退園児が来ることができるような「夏季特別保育日」を数日設けています。

普段は別の園や、子どもによっては別の地域、別の国で過ごしている子たちが、うれしさよりもやや緊張が勝ったような、照れくさそうな面持ちでやって来ます。





久しぶりのナーサリーで過ごすうち、在園時より言葉もうまく話すようになり、大きくなってはいるけれども、一緒に過ごしたあの頃と同じ笑顔、同じ笑い声で遊ぶようになってきます。ここ(ナーサリー)に今いる子たちは、必ずしも知った顔ばかりではないけれど、いつの間にか、昨日も一昨日も一緒に過ごしてきたかのような親しさで接するようになるから不思議です。しかもそれは、ピカピカでキラキラの時間ではなく、まるで昨日の続きの日常のような、「また明日ね」「また遊ぼうね」と言って別れるようなごく普通の1日。そして、来る子も、迎える子も、終始ちょっぴり照れくさい、とってもうれしい、そんな1日です。照れくさい、って、自分の中に人の存在があるからこそのとっても不思議な気持ちで、みずみずしく人間らしくあることのひとつの証拠なのかもしれないな、と、ふと感じたりします。　　(主任保育士K)

子ども学のひろば

お便り POST

◇私の「カルチャー・いんふぉ」◇

ハワイに行かれたことがありますか？

ハワイと聞くとリゾート、ビーチ、芸能人の休暇などを思い浮かべますが、ハワイにも実はさまざまな側面があります。例えば住人という観点では、先住民であるポリネシア系の人、アメリカ本土からの白人以外にも日系人が比較的多く、日本との関係が非常に深い地域です。日本人は1868（明治元）年に初めて移住し「元年者」とも呼ばれます。集団での海外移住というと、戦前戦後の中南米地域を思い起こします。日本の経済事情が悪い時に、農家の次男、三男などが海外で土地を耕して故郷に錦を飾ろうと意気揚々と船出しましたが、ハワイの移住者たちもサトウキビの畑での重労働で大変な苦労をしました。

バスに乗って、ワイキキの喧騒から離れた郊外の住宅街に向かうとBishop Museumというハワイに関する資料を集めた総合文化施設があります。建物は文化財であるクラシックなれんが造りですが、海に囲まれた島しょ地域ということで、原寸大のクジラのモデル等が高い吹き抜けに吊り下げられていて訪問者の度肝を抜きます。元年者の写真や資料の展示では日本語ツアーも開催されていました。

絵本『ハワイ島のボンダンス』（いわねあい文、おおともやすお 絵　福音館書店 2016年）で、父親と祖母と共に祖母の妹を訪ねたまさるは、ハワイ在住の日系人の信仰の場としての仏教の寺や、夏の盆踊りを体験します。女性たちは煮しめ・きんぴらなど日本の味やハワイ独自の墓参用のお供えを用意し、大人も子どもも太鼓に合わせて輪になって踊り、先祖に感謝します。まるで少し昔の日本の風景を見るようです。（参考：『ハワイ』山中速人 岩波新書1993年）　（AK）

OMEP(世界幼児教育・保育機構)アジア・太平洋地域大会2019 in京都

会 期：2019年9月5日(木)、6日(金)、7日(土)
会 場：京都テルサ（京都府民総合交流プラザ）
【京都市南区東九条下殿田町70
（京都駅より徒歩15分)】
大会テーマ：Quality of ECEC（Early Childhood Education and Care）（保育の質）
参加申込：2019年4月1日～7月15日
基調講演・シンポ（同時通訳あり）、研究発表、施設訪問など。
※詳細はOMEP日本委員会公式サイトをご覧ください。　https://www.omepjpn.org/

お茶の水女子大学社会人講座（文科省BP認定）「保育・子育て支援ラーニングプログラム」2019年度 後学期（10月開講）受講生募集

お茶大ECCELL社会人プログラムが2019年度から新しくなりました。お茶大こども園と大学・大学院が連携し、保育実践者や一般社会人を対象とした学びの場を、10月～下記のとおり開講します。
＊男性も受講可能です。

Brush up Program for professional

【開講科目】
・「乳幼児の世界Ⅱ」（1単位、集中講義）
　担当：宮里暁美
・「保育人間学演習」（2単位、大学院科目、金曜18：20～19：50）担当：浜口順子
・からだ・表現ワークショップ（秋季予定、公開型、9月以降募集）
【出願期間】2019（令和元）年7月18～24日
【Eメール】nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp
【TEL】03-5978-5826（担当 浜口）
詳しくは大学HPをご覧ください。⇒
http://www.ocha.ac.jp/news/20190206_d/fil/20190206_02.pdf

編集後記

新元号が発表され、平成最後の月となった４月に、今号発行の準備を進めているところです。いつの間にか、パソコンで「れいわ」と打ち込むと「令和」と変換されるようになっていて、まだなじみのない２文字の画面上の出現に戸惑いを禁じえません。

その令和元年最初の号の巻頭に、昨年12月に旅立たれた津守真先生の追悼特集を組みました。ご寄稿いただいた方々は、それぞれの文章で、ご自身の心の中に生きる津守先生を伝えてくださっています。

９年前、弊誌は月刊から季刊への転換を選択することになり、元編集主幹の津守先生にもその旨をお伝えしご了承を頂かなくてはと、浜口編集主幹と編集担当の３人で、東京白金の先生のご自宅に伺ったことがありました。ご夫妻で迎えてくださり、お部屋に通され、先生は手土産の和菓子一つ一つに「これは何？」と興味を示されました。その中に「千客万来」というお菓子があったのですが、その名前が気に入ったのか、「ここは千客万来といきましょう」と朗々とおっしゃって手に取られ、それまでの少し硬かった空気が、その一声で瞬時に和んだのでした。季刊化についてのご返事は、深いうなずきとともに一言、「大いにおやりなさい」ということでした。

あの時の津守先生の静かな後押しをもって現在の弊誌があります。新時代への期待高まる機運の中、先人から託された課題と思いを引き継ぎ、歩み続ける私たちでありたいと思います。（TK）

次号予告　幼児の教育秋号 2019年10月刊行予定

新連載も好評！　充実した内容でお届けします。

◇ 津守 真 追悼特集　2
「津守眞先生を追悼し語らう会」の報告

◇ 津守先生と「はるにれの会」　入江礼子氏・友定啓子氏

◇ フレネ学校訪問記　永倉みゆき氏

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 夏号 第118巻 第3号

令和元年７月１日発行
編集発行人／浜口順子
編 集 担 当／田中恭子
発 行 所／お茶の水女子大学
『幼児の教育』編集委員会
〒112－8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学
浜口順子研究室内
youji-no-kyouiku@cc.ocha.ac.jp

発 売 所／株式会社フレーベル館
電話：03-5395-6604（編集）
振　　替／00190-2-19640
印 刷 所／図書印刷株式会社
定　　価／本体880円+税
©お茶の水女子大学『幼児の教育』編集委員会
2019 Printed in Japan　無断転載禁止
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
編集委員／上坂元絵里
菊地知子
松島のり子
宮里暁美
お茶大３園合同研究会
（附属幼稚園、
いずみナーサリー、
文京区立お茶大こども園）
編集協力／フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613（営業）●

好評発売中

0・1・2歳児からのていねいな保育（全３巻）

監修／汐見稔幸（東京大学名誉教授）

乳幼児保育にかかわるすべての人に。アタッチメントや体の発達など様々な専門分野の研究者による知見を集めた理論編「第１巻」と、保育の基本・実践をお伝えする「第２巻」・「第３巻」で、乳児理解だけでなく、保育者のマインドを育てます！！ これからの保育新時代に備えておきたい必携の書。

0・1・2歳のことがわかると、保育がもっと楽しくなる！

新「保育所保育指針」対応！！

第１巻 ここまで見えてきた赤ちゃんの心の世界

109-70 ISBN978-4-577-81453-6

第２巻 毎日の保育をより豊かに 保育の基本

109-71 ISBN978-4-577-81454-3

第３巻 ていねいな保育実践のために 保育の実践

109-72 ISBN978-4-577-81455-0

本文 各104～128ページ、１色刷、23×18cm（B5判変形）
定価本体 各2,100円＋税

執筆
第１巻：遠藤利彦（東京大学大学院）、開一夫（東京大学大学院）、榊原洋一（お茶の水女子大学）、麦谷綾子（NTTコミュニケーション研究所）、小保内俊雅（多摩北部医療センター）、星山麻木（明星大学）、友田明美（福井大学子どものこころの発達研究センター）**第２巻：**井桁容子（乳幼児教育実践研究家）、岩井久美子（まちの保育園六本木）**第３巻：**井桁容子（乳幼児教育実践研究家）

キンダーブックのフレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社保育事業部(03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一一八巻　第三号　令和元年七月一日発行

最新刊

無藤 隆、大豆生田啓友監修

子どもの姿ベースの指導計画がスラスラ書ける！

子どもの姿ベースの 新しい指導計画の考え方 新要領・指針対応

無藤 隆、大豆生田啓友／編著
髙嶋景子、三谷大紀、北野幸子、齊藤多江子、松山洋平、和田美香／執筆

指導計画の考え方をマンガやイラストでわかりやすく解説した理論編

96ページ　26×21cm　定価 本体2,408円＋税
109-74　ISBN978-4-577-81468-0

0・1・2歳児 子どもの姿ベースの 指導計画 新要領・指針対応

無藤 隆、大豆生田啓友／編著
髙嶋景子、齊藤多江子、和田美香／執筆
子どもの姿からつくる指導計画の考え方と、0・1・2歳児の年間計画・月案・資料を掲載

192ページ　26×21cm　定価 本体2,900円＋税
109-75　ISBN978-4-577-81469-7

3・4・5歳児 子どもの姿ベースの 指導計画 新要領・指針対応

無藤 隆、大豆生田啓友／編著
三谷大紀、北野幸子、松山洋平／執筆
子どもの姿からつくる指導計画の考え方と、3・4・5歳児の年間計画・月案・資料を掲載

192ページ　26×21cm　定価 本体2,900円＋税
109-76　ISBN978-4-577-81470-3

定価　本体八八〇円＋税

キンダーブックのフレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社保育事業部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。